平成20(2008)年度

史跡鳥取城跡太鼓御門跡

し せき とっ とり じょう せき たい こ ご もん あと

発掘調査報告書

2009. 3

鳥取市教育委員会

序

この発掘調査報告書は、史跡鳥取城跡附太閤ケ平保存整備事業の一環として実施した、鳥取城跡太鼓御門跡の発掘調査記録です。

鳥取市の中心市街地にそびえる久松山に所在する鳥取城跡は、国の史跡であり、後世に継承していくべき貴重な市民の財産です。鳥取市では、現在『史跡鳥取城跡附太閤ケ平保存整備基本計画』を策定し、関係各機関・専門家の指導を得て、一部建物復元を含む長期的な保存整備事業に取り組んでいます。

今年度の太鼓御門跡の発掘調査は、その一環として、史跡整備に必要な情報を得るために実施したものです。

関係各位のご助力によって、無事所期の目的をはたし、報告書刊行のはこびとなりました。ささやかな冊子ではありますが、市民の皆様並びに関係各位のご利用に供していただければ幸いです。

平成21年３月

鳥 取 市 教 育 委 員 会

教育長　中　川　俊　隆

例　　言

１．本書は、平成20年度に国、県の補助金を得て、平成20年（2008）度に実施した実施した鳥取城跡太鼓御門跡の発掘調査報告書である。
２．本書に用いた方位は磁北を示し、レベルは海抜標高である。
３．発掘調査によって作成した記録類及び出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管している。
４．本報告書の編集は、鳥取市教育委員会（坂田邦彦、細田隆博）が担当した。
５．第１図には国土地理院発行の１：25,000地形図「鳥取北部」を使用した。

目　　次

序

例言

目次

第Ⅰ章　調査の経緯と概要
発掘調査に至る経緯
　1　保存整備計画の概要……1
　2　太鼓御門跡の概要……1
　3　発掘調査体制……2

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境……3

第Ⅲ章　調査の結果
　1　第１・２調査区……9
　2　第３調査区……25

第Ⅳ章　出土遺物
　1　第１・２調査区……28
　2　第３調査区……35

第Ⅴ章　まとめ……40

挿　図　目　次

第１図　鳥取城跡位置図（Ｓ=1/35000）……4
第２図　鳥取城跡　山上ノ丸・山下ノ丸位置図（Ｓ＝1/2500）……７～８
第３図　調査区位置図（Ｓ＝1/300）……10
第４図　第１・２調査区実測図（Ｓ＝1/50）……11～12
第５図　Ａ-Ｂ断面土層図（Ｓ＝1/50）……13
第６図　上層礎石実測図（Ｓ＝1/40）……14
第７図　礎石根固め実測図（Ｓ＝1/40）……14
第８図　柱想定位置図（Ｓ＝1/120）……14
第９図　溝状遺構１実測図（Ｓ＝1/50）……16
第10図　溝状遺構２・３実測図（Ｓ＝1/40）……17
第11図　Tr-１・２・５、Ｃ-Ｄ断面土層図（Ｓ＝1/40）……19
第12図　Tr-６・７実測図（Ｓ=１/40）……20
第13図　下層礎石周辺実測図（Ｓ＝1/40）……22
第14図　第３調査区Tr-１実測図（Ｓ＝1/40）……24
第15図　第３調査区Tr-２実測図（Ｓ＝1/40）……25
第16図　第３調査区Tr-３実測図（Ｓ＝1/40）……25
第17図　第３調査区Tr-４実測図（Ｓ＝1/40）……26
第18図　第３調査区Tr-５実測図（Ｓ＝1/40）……27
第19図　第３調査区Tr-６実測図（Ｓ＝1/40）……27
第20図　第１・２調査区出土遺物実測図１（Ｓ＝1/３・１/１）……29
第21図　第１・２調査区出土遺物実測図２（Ｓ＝1/４）……30
第22図　第１・２調査区出土遺物実測図３（Ｓ＝1/４）……31
第23図　第３調査区出土遺物実測図１（Ｓ＝１/３・１/４）……32
第24図　第３調査区出土遺物実測図２（Ｓ＝１/４）……34
第25図　出土刻印瓦拓影（Ｓ＝１/１）……36
第26図　鳥取城修復願絵図〈万延元年（1860）10月〉……41
第27図　鳥取城三ノ丸絵図（部分）および礎石位置復元図……42

表　目　次

表１　出土遺物観察表１……37
表２　出土遺物観察表２……38
表３　出土遺物観察表３……39

挿入写真目次

写真１　溝状遺構1検出状況……16
写真２　Tr-6……20

写真３　Tr-7 ……20
写真４　鳥取城古写真……41
写真５　太鼓御門周辺（明治期）……42
写真６　地震により崩壊した石垣……42

図　版　目　次

図版１
　１　第１調査区全景（西から）
　２　第２調査区全景（南西から）
図版２
　１　第２調査区Tr-６石垣積み替え（西から）
　２　第２調査区Tr-７石垣積み替え（北西から）
　３　第２調査区Tr-６全景（南東から）
　４　第２調査区Tr-６・７全景（南東から）
　５　第２調査区Tr-７北西土層（南西から）
　６　第１調査区焼土面（南東から）
図版３
　１　第１調査区下層礎石１・２（南東から）
　２　第１調査区下層礎石３（南東から）
　３　第１調査区Tr-９北東壁土層図（南西から）
　４　第１調査区Tr-８岩盤（北東から）
　５　第１調査区焼土面（南東から）
図版４
　１　第２調査区礎石根固め（南東から）
　２　第１調査区溝状遺構１（北東から）
　３　第２調査区溝状遺構２・３（南から）
　４　第１調査区A-B断面土層上層礎石１下部（北西から）
　５　第１調査区A-B断面土層（北西から）
図版５
　１　第１調査区東側全景（北西から）
　２　第１調査区西側全景（北西から）
　３　第２調査区全景（北東から）
　４　第２調査区東側全景（南東から）
　５　第２調査区西側全景（南東から）
　６　第１調査区Tr-１全景（南西から）
図版６
　１　第２調査区Tr-２全景（南から）
　２　第２調査区Tr-７北東壁土層（南西から）
　３　溝状遺構１（南西から）
　４　溝状遺構２土層（北西から）

5　溝状遺構３（南西から）
6　上層礎石１（南西から）
7　上層礎石２（南西から）
8　上層礎石３（南西から）

図版７
1　上層礎石２・３（南西から）
2　土坑１（北西から）
3　礎石根固め１（北西から）
4　C-D断面土層（南東から）
5　太鼓御門櫓台（西から）
6　礎石根固め２（北西から）

図版８
1　第３調査区Tr-１全景（北東から）
2　第３調査区Tr-１（南西から）
3　第３調査区Tr-１（東から）
4　第３調査区Tr-１（南東から）
5　第３調査区Tr-２全景（北西から）
6　第３調査区Tr-２遠景（北西から）

図版９
1　第３調査区Tr-３全景（北西から）
2　第３調査区Tr-３北西側（北西から）
3　第３調査区Tr-３溝状遺構（南西から）
4　第３調査区Tr-４全景（南西から）
5　第３調査区Tr-４石垣接合部（西から）
6　第３調査区Tr-４（南東から）

図版10
1　第３調査区Tr-４・５（南東から）
2　第３調査区Tr-５全景（南西から）
3　第３調査区Tr-５南東壁土層（北西から）
4　第３調査区Tr-６全景（南西から）
5　第３調査区Tr-６南東壁土層（北西から）

図版11
1　第３調査区周辺（北から）
2　太鼓御門現況（南西から）
3　鳥取城遠景（南西から）

図版12
出土遺物

図版13
出土遺物

図版14
出土遺物

第Ⅰ章　調査の経緯と概要

発掘調査に至る経緯

1　保存整備計画の概要

鳥取市は、昭和32年の指定以来、国史跡である鳥取城跡附太閤ヶ平の保存と活用にとりくんできており、現在は、平成17年度に『史跡鳥取城跡附太閤ケ平保存整備基本計画』、平成18年度に『史跡鳥取城跡保存整備実施計画』を策定し、鳥取城跡の保存整備と調査研究を長期計画に基づいて推進している(なお、これらの計画は市民と専門家からなる検討委員会の検討と、パブリックコメントの実施を経て策定したものである)。

史跡鳥取城跡、特に近世城郭部分の保存整備にあたっては、現在不明瞭になっている鳥取城の全体プランの顕在化を大きなテーマとしており、可能な範囲での建造物復元等も含め、江戸時代末期の姿を顕在化するための整備を段階的に整備を進めることとしている。中でも、全体プランの顕在化について効果が高いと考えられる「大手登城路」を第一段階の整備対象として位置づけている。この範囲については、遺構の保存状態が比較的良好と考えられることから、建造物を含む復元整備を視野に入れた整備計画としている。

太鼓御門渡櫓は、この「大手登城路」整備の中心をなすものとして、平成19年度より復元整備基本設計に着手している。周辺資料等の調査がある程度進展したことから、今年度、建造物遺構の遺存状況と、調査成果と遺構の関係の確認を目的として、発掘調査を実施することとなった。

大手登城路は、現在、鳥取西高等学校の主導線となっているが、西高等学校の老朽化に伴う現地改築が計画されており、この際に史跡整備に必要な範囲を学校の使用範囲から除外し、大手登城路の整備を高等学校の改築と一体的に行なうこととしている。現時点では、通学する生徒・学校関係者が使用している状態であり、自家用車や物品搬入トラックなども通行していることから、鳥取県教育委員会及び鳥取西高校と協議し、調査区を分割して、迂回路を確保するとともに、学校の夏期休暇期間を中心に調査期間を設定するなどして調査を実施した。

なお、鳥取城跡内には、他にも、鳥取県立博物館が所在するほか、明治40年建築の仁風閣が現存しているが、現在の計画では、これらの併存を当面許容しつつ、史跡の価値を向上するための整備を実施することとしている。

2　太鼓御門跡の概要

太鼓御門は、鳥取城山下ノ丸のほぼ中央部、天球丸・二ノ丸・三ノ丸という主要な郭への登城路の中ほどに位置していた門で、鳥取城の中枢に至る道筋に置かれた、重要な門である。枡形状に組まれた石垣で構成され、渡櫓門の他、番小屋・時打小屋などが所在している。太鼓御門の前後で地形的な高低差がかなりみられ、現在でも、旧登城路は急勾配の道路となっている。

家老等、高位の家臣も、この門の外で駕籠を降りることになっており、藩主の居所・藩政の中枢に至る結界として、高い格式をもつ門と考えられる。

創設時期は未詳であるが、元和５年の「因幡国鳥取絵図」(岡山大学付属図書館所蔵）に現状とほぼ同じ枡形プランをもつ太鼓御門が描かれていることなどから、門としては、近世鳥取城築城の比較的早い段階で設置されたと推定される。享保３年に三ノ丸に藩主の居所として御殿が造営され、郭自体も改修された際には、三ノ丸のみ太鼓御門を通らずに通行できるようになっていた。その後、享保５年の石黒火事後の登城路の整備によって、枢要部への正式の通路はすべて太鼓御門を経由する形に整理され、現在の形態となった（『鳥取藩史』第二巻「職制志　一」)。鳥取県立博物館所蔵「鳥取城修覆願絵図」

(享保６年）等の城絵図の描写も、享保５年を境に変化しており、このことを裏付けている。この、享保５年の復興工事によって、三ノ丸御殿を含む鳥取城の基本構造が完成されたと考えられる。現在、その時の登城路は太鼓御門までしか残っていないが、これはその後、幕末期の三ノ丸拡張に伴って、太鼓御門より上手、二ノ丸・天球丸に向かう部分の登城路が付け替えられて極めて狭わいなものに改変されたためである。

以上のように、太鼓御門周辺の平面プランは、享保５年の石黒火事に伴う再建時に確立された。現存する石垣は、それを継承したものといえるが、昭和18年の鳥取大震災に際して崩壊した部分もある。現在見ることのできる石垣のうち、南側石垣の登城路側１／３程度は、三ノ丸御殿跡に所在する鳥取県立鳥取西高等学校の整備に伴う修復を受けており、北側石垣は、鳥取大震災で崩壊したままになっていたものを、平成10年～12年度に文化財保存整備事業を実施して復元したものである。

太鼓御門の建造物は明治８年前後に解体されて現存せず、石垣も昭和18年の鳥取大震災に際して崩壊した部分が少なくないが、枡形虎口状の石垣の基本プランは現存しており、平成10年度の北側石垣修復に伴う発掘調査では、井戸や建物礎石、列石等の遺構が埋蔵されていることが確認されている。

鳥取城跡三ノ丸跡は、明治22年以降、鳥取第一中学校及びそれを継承する鳥取県立西高等学校の学校用地として利用されており、太鼓御門跡も正門・テニスコートなどとして使用されてきたため、現状では登城路上にはアスファルト舗装が施され、部分的に花壇としての植栽が行われている。また、昭和18年まで奉安殿のあった南側石垣には行啓碑が設置され、桜が植栽されている。

３　発掘調査体制

調査主体	鳥取市教育委員会　教育長　中川俊隆
事務局	鳥取市教育委員会文化財課（鳥取城整備推進係）
	文化財課長　平　川　　誠
	課長補佐　清　水　富　和
	係長　佐々木　孝　文
	主幹　松　原　雅　彦
	主事兼文化財専門員　坂　田　邦　彦
	主事兼文化財専門員　細　田　隆　博
調査指導	文化庁記念物課、鳥取県教育委員会、鳥取県立博物館、鳥取市歴史博物館、鳥取市埋蔵文化財センター、田中哲雄、浅川滋男、麓和善、吉村元男、錦織勤、北垣聰一郎、谷本進、西尾孝昌（敬称略、順不同）
調査協力	鳥取県立鳥取西高等学校、鳥取市都市整備部都市計画課、（財）鳥取市公園・スポーツ施設

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境

位置と地形

扇状に広がった鳥取市街地の要に位置する鳥取城は、鳥取平野の東北端に聳える久松山（標高263m）に占地する。鳥取平野は、中国山地に水源を持つ千代川及びその支流によって形成された沖積平野である。一方、久松山は中生代末の花崗岩からなる孤立峰で、山頂は鮮新世火山岩類の玄武岩が覆う。鳥取平野は因幡国に所在し、山陰諸国を貫く東西交通と、山陽地方とを結ぶ南北交通との結節点にあたる要衝の地であった。鳥取城はまさにその平野を掌握する場に立地し、山上ノ丸からは、鳥取平野の大部分を見渡すことができ、千代川の河口や西の伯耆、東の但馬へ続く海岸線なども望むことができる。鳥取城を扇の要として鳥取市街地が広がるのも、その起源が鳥取城下町であることを如実に示している。

久松山は南西面とその背面が急峻な地形である。一方、北西は標高100m付近で尾根伝いに丸山方面の山塊と繋がり、他方、東側に横たわる山塊とは標高150m付近で尾根伝いに繋がっている。久松山麓の西面はかつて日本海へと注ぐ袋川の旧河川が蛇行して、低湿地を形成していたと言われ、鳥取の城下町は惣構の開削などで低湿地帯を克服しながら形成された。また、古代の中心地であった国府周辺へと続く古道が山麓を通っていたと考えられ、久松山麓は古くから河川交通と陸上交通の要衝であったと思われる。なお、鳥取城の西約５㎞の湖山池東岸には、中世において因幡守護所であった天神山城（県史跡）が所在し、鳥取城の東には羽柴秀吉が鳥取城攻めの際に在陣した太閤ヶ平（国史跡）が所在する。

歴史

鳥取城の起源は天文年間（16世紀中頃）に遡る。鳥取城の所在する因幡は、西の伯耆、東の但馬と共に南北朝期以来、代々山名一族が守護職を継承してきた。しかし、天文12年（1543）頃までには伯耆が出雲尼子氏の傘下となり、尼子氏を背景に自国支配の強化を狙う因幡守護山名久通もまたその支配下となった。これに対し、但馬山名守護山名祐豊は惣領家として先祖伝来の領国支配の回復などを目指し、山名久通と因幡の支配権を巡り鋭く対立。この過程で但馬山名氏の戦略的拠点として鳥取城は誕生したと考えられている。

まもなく因幡山名氏は滅亡し、以後因幡国内は、かつて因幡山名氏の本拠であった天神山城を中心に但馬山名氏による支配が進められる。一方、鳥取城は天神山城の出城としての役割を負った。ところが、これを守る武田高信が永禄６年（1563）に主家山名氏に対して反旗を翻す。この後、鳥取城を巡る攻防戦が続くことになるが、鳥取城の因幡における戦略的・政治的拠点としての重要性が認識されることとなった。やがて、因幡守護山名豊国は諸勢力の協力を得て武田高信を鳥取城から退け、天正元年（1573)、守護所であった天神山城から因幡の本拠を鳥取城に遷す。

同じ頃、鳥取城は中国地方を勢力圏とする毛利氏の傘下となる。一方、天下統一を目指す織田信長は覇権を因幡に接する但馬や播磨に広げつつあった。両国からの交通の結節点であり、毛利方の最前線となった鳥取城。ここに織田・毛利軍の攻防戦が開始される。

天正８年（1580)、信長に命を受けた羽柴秀吉が因幡に侵攻する。秀吉の巧みな戦略の前に山名豊国は降伏を余儀なくなされたが、秀吉が姫路に帰陣すると俄かに情勢が転化する。毛利勢力が因幡まで勢力を盛り返すと、豊国の決定を不服とする重臣たちは山名豊国を追放し、代わって迎えた毛利方の吉川経家と共に、再び秀吉に徹底抗戦し因幡国内を奪還する道を選ぶ。なお、豊国はその後、豊臣秀吉、徳川家康・秀忠のお伽衆として活躍した人物である。

天正９年（1581)、再び因幡に入った秀吉は、周囲に大陣城群を巡らせ鳥取城を厳重に包囲した。いわゆる兵糧攻めである。城兵はおよそ４ヶ月の間、飢餓状態で奮戦したが経家の自決をもって降伏した。この時に構築された秀吉側の陣城群は鳥取城を取り囲む山並みに今でも残る。特に本陣山（標高252m）には秀吉が在陣した太閤ヶ平を中心に“秀吉の長城”とも言うべき長大な防衛ラインがほぼ完存し、織

第１図　鳥取城跡位置図（S=1/35000）

田政権の軍事力の威力をまざまざと伝えている。

織田方に屈した鳥取城には新たに秀吉の有力家臣である宮部継潤が城代として入る。秀吉の側近として奉行人やお伽衆を務め、豊臣政権を支えた人物である。天正17年（1589）に至り豊臣秀吉から正式に知行を宛がわれ、継潤は因幡国７郡の内、４郡の５万石（但馬の一部を含む）を領し、名実ともに鳥取城主となった。宮部氏は息子・長熙の時に関ヶ原の合戦で西軍に属し改易となったため、その業績は不明な部分が多いが、宮部継潤父子は因幡における織豊政権の最重要拠点として、鳥取城を大改築したと思われる。それまでの鳥取城は自然地形を巧みに利用した土造りの中世城郭であった。一方、宮部氏は装いも新たに石垣などを構築し、織豊系城郭としての鳥取城を築いたと考えられる。

慶長５年（1600）の関ヶ原合戦で徳川政権は樹立されたが、大坂城には豊臣家が健在で豊臣恩顧の大名に対する支配強化のため、徳川家康は厚遇する池田家を西国境に配置したとも言われる。この時、姫路城に池田輝政、岡山城に忠継（輝政の次男）が入り、鳥取城には長吉（輝政の弟）が因幡７郡の内４郡６万石の知行を得て入城した。ここに西国境の瀬戸内から日本海を縦断する徳川政権の拠点城郭網が構築され、鳥取城はその一翼を担った。なお、江戸時代の地誌を根拠に、これまで鳥取城の現存遺構のほとんどは池田長吉が構築したと信じられてきた。しかし、根拠となる『因幡民談記』（17世紀後半成立）には、局所的な普請の様子が詳述してあるが、現存遺構のほとんどを池田長吉が構築したという記載はない。

元和元年（1615）、大坂夏の陣で豊臣家が滅亡すると、池田家への処遇は転機を迎えた。元和３年、姫路城主池田光政は所領減封の上、因幡伯耆32万石の領主として鳥取へ転封となり、池田家が構築した姫路城は譜代大名のものとなる。光政入封に伴い小大名に分割統治されていた因幡と伯耆は統合され、現在の鳥取県域とほぼ同じ鳥取藩が誕生した。しかし、鳥取城は宮部時代から５、６万石規模のものに過ぎず手狭であったため、光政は城の大拡張を行なう。『因幡国鳥取絵図』（岡山大学附属図書館蔵）には、当時、最新鋭であった層塔型と想定される白亜の三階櫓が描かれるなどしており、二ノ丸や天球丸といった主要曲輪の大部分は、この時に構築された蓋然性が極めて高い。また、光政は城下町も拡張し、武家地には上水道を完備した。その町割や延長1.6㎞の惣構、上水道の水源地はいずれも現存し、鳥取の中心市街地には光政の土木遺産が色濃く残っている。

寛永９年（1633）、岡山城主池田忠雄の死去に伴い、幼少の光仲が家督を継ぐと幕府は従兄弟の光政との国替を命じた。以後、鳥取城は光仲を藩祖とする鳥取池田家32万石12代の居城となり、国内有数の大藩の政庁として改修や拡張が繰り返された。特に幕末には、二ノ丸や三ノ丸の拡張などの大規模な増改築が行なわれ、現存する遺構の姿が整えられた。

明治維新後の鳥取城は、陸軍省の所管となり明治12年（1879）には象徴的な櫓などが解体された。以後、山下ノ丸の約半分は公共的な施設が相次いで建設され、公園としても整備される。鳥取城は地形的な制約などもあって放置され荒れるに任せた状態であったものの、現在の県立鳥取西高等学校と鳥取県立博物館の敷地を除いては、江戸時代の縄張りと構築当初の石垣を良好に保っていた。しかし、昭和18年（1943）の鳥取大震災により城内の至る所で石垣崩壊という甚大な被害を受ける。その後、昭和32年（1957）には、織豊時代から近世徳川時代に移行する転換期の歴史に深い関係をもつ史跡であること、城跡の構成が前記の歴史的推移と対応し山城的型式を残す山上ノ丸と中腹の砦跡等の古い城跡遺構に対し、近世的城郭形式を残す山下ノ丸を中心とする新しい城跡遺構が新旧重層して併存することが学術的に高く評価され、鳥取城は太閤ヶ平と共に国の史跡指定を受ける。昭和34年からは、山下ノ丸を中心に鳥取大地震で崩壊した石垣の復元事業が開始され現在も実施中である。

構造

鳥取城は久松山の全域を城郭とし、各時期の遺構が残る。ここでは、山頂部分の山上ノ丸、山麓部分の山下ノ丸、その他山腹部分の３区に分けて概観したい。

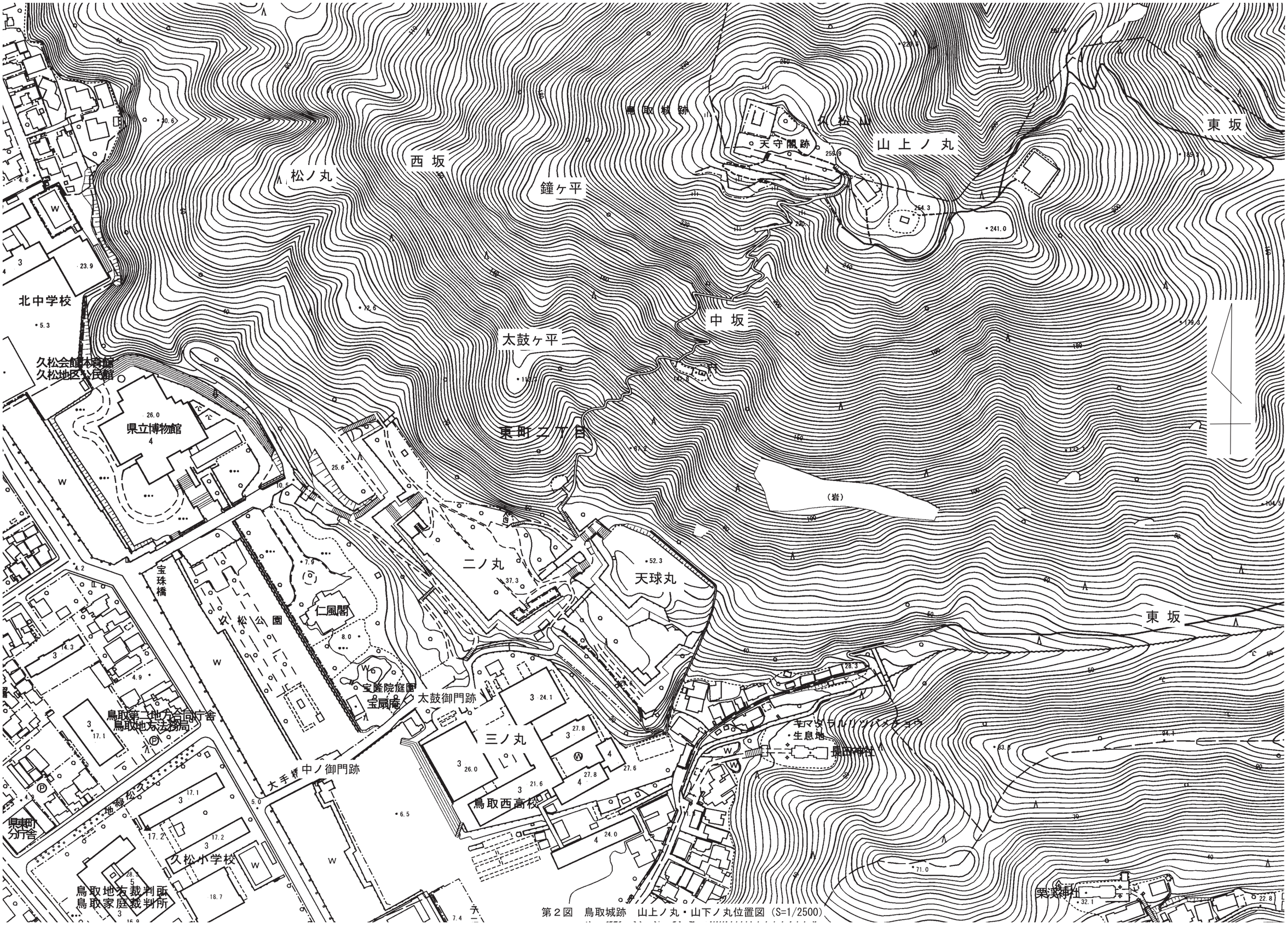
山上ノ丸　本丸を最高地として、ニノ丸、三ノ丸が階段状に配され、それを巡る帯曲輪から構成される。本丸、ニノ丸の全域、及び帯曲輪の内のうち城下側の部分（出丸）が総石垣化されている。本丸の北西角には天守台がある。宮部期の三層の天守を池田長吉が二層に改築したと考えられ、その改修痕跡と思われる石垣の継ぎ目が天守台の南西角に見られる。その後天守は元禄５年（1692）落雷により焼失し、以後再建されることは無かった。鳥取城内において最古相の石垣が本丸南面を構成するなど、山上ノ丸一帯は、宮部時代に大部分が構築され池田長吉以降において局所的な改修が行なわれたと思われる。三ノ丸から東坂へ続く尾根筋には登り石垣状の遺構も見られ、倭城との関連性が指摘されている。

山下ノ丸　山下ノ丸は主に高石垣で構成される天球丸、ニノ丸と最大面積を有する三ノ丸などからなる。山下ノ丸は幅約30mの水堀が南西側を巡り、三つの門で外部と繋がっていた。天球丸の南東端とニノ丸の北西端は巨大な竪堀で防御される。幕末の増改築を除くと、『因州鳥取之城之図』、『因幡国鳥取絵図』（いずれも岡山大学附属図書館蔵）などから、天球丸、ニノ丸は池田光政期を中心に構築されたと考えられる。天球丸は池田光政の伯母天球院の居所があった場所で、平成４年（1992）から続く石垣の保存修理事業で織豊期と思われる石垣が出土し、平成13年（2001）の楯蔵跡発掘調査では関ヶ原合戦時と想定できる焼土面が出土しおり、天球丸周辺が織豊期の中心域であった可能性が高まっている。ニノ丸は池田光政期以降、江戸時代中期まで藩政の中心となった場所である。二ノ丸は、中腹の太鼓ヶ平から三ノ丸入口の太鼓御門に至る尾根を削平して構築したようで、二ノ丸背後には石垣石を切り出した痕跡が残る。昭和54年（1979）の石垣解体に伴って現状の高石垣の下層から、池田光政期以前の曲輪を構成した石垣が出土している。三ノ丸は江戸中期以降、藩政の中心になった場所である。幕末にも大規模な拡張がなされ、城内最大の面積を有する曲輪として整備された。現在その全てが県立高校の敷地となっている。その他、お堀端沿いの丸ノ内には、馬場や米蔵が存在した。一段高い所には、明治40年(1907)、皇太子（後の大正天皇）の行啓宿舎として旧鳥取池田家が建てた仁風閣（国重文）があり、その北西には県立博物館が立地する。いすれもかつての城内に存在し、山下ノ丸は北西―南東方向に約550m、北東―南西方向に約350mの規模を誇っていた。

山腹の遺構群　久松山本体では、山頂から派生する主要な尾根部分と山上ノ丸直下の削平地群と区分できる。主要な尾根に派生する曲輪群は、鳥取城創建期から秀吉の鳥取城攻めまでの中世段階の遺構と考えられる。太鼓ヶ平から山下ノ丸へ派生する尾根は、江戸時代前期の大規模な曲輪造成によって削平されたと考えられ、西坂が旧態を良く残している。松ノ丸では石垣が見られることから織豊期以降も一部利用されたようである。山上ノ丸直下にみられる削平地群は、尾根の主要曲輪群とは独立した一群である。部分的に矢穴による半裁途中の転石が遺存しており、石取場と考えられる。後の曲輪利用の可能性もあるが、急斜面における石取場の状況をよく反映しており、類例として戸室山（石川県）や日引(福井県）の急斜面で見られる石切丁場が上げられる。また、東坂中の水道池周辺には中世寺院と思われる遺構群や、大規模な横堀状の遺構で囲まれた曲輪なども存在しているが、遺構の性格については今後さらなる調査研究が必要である。

参考文献

大阪城天守閣2007『秀吉お伽衆―天下人をとりまく達人たち―』
鳥取県立博物館1989『久松山鳥取城―その歴史と遺構―』
鳥取県2007『鳥取県史ブックレット１　織田vs毛利―鳥取をめぐる攻防―』
鳥取市教育委員会1997『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平天球丸保存整備事業報告書』
鳥取市歴史博物館2001『大名池田家のひろがり―信長・秀吉そして徳川の時代へ―』
細田隆博2008「鳥取城」『決定版鳥取・岩美・八頭ふるさと大百科』郷土出版社



第２図　鳥取城跡　山上ノ丸・山下ノ丸位置図（S=1/2500）

第Ⅲ章　調査の結果

１　第１・２調査区（第４図）

学校運営の都合上、道路部分を半分ずつ分割し、それぞれを第１、第２調査区として調査を実施したが、両区は隣接地であり、遺構の連続性もあるためここでは「第１・２調査区」としてまとめて報告する。

遺構面に至る層序関係としては、現露盤面から30～40㎝は近代以降の層である。アスファルトは５㎝程度の厚さであり、その下にはアスファルト敷設以前の道路面である小石混ざりのコンクリートが15～20㎝にわたり厚く敷かれている。後述するが上層礎石３とした石については、アスファルト直下で、上面を露出したまま検出されており、戦後のアスファルト敷設時までは露出していたようである。アスファルトおよびコンクリートは礎石や敷石上に直接敷設されていたため、石の表面にはこれらが付着しており遺存状態は良いとは言えなかった。コンクリート下は礎石列より南西側については基礎と思われる拳大の石、敷石より北東側には戦後の造成土が10～15㎝ほどみられた。遺構面はこれら近代以降の層直下に存在するが、上部の改変が著しいため遺存状態は極めて悪く、調査の目的でもあった幕末期面の検出は困難であった。

遺構面の層序関係（A-B断面土層、第５図）

調査区北西側石垣沿いの溝を撤去後、壁面の土層観察を行った。石垣修理や溝工事により壁面は凹凸著しかったが、遺構保護の立場から大きな掘削はせず、現状での図化を行った。

土層は38層確認し、大きく６つの単位に分かれる。

・Ⅰ（１～７層）近代以降の層

１・２は近代の工事による撹乱層であり２～７層はコンクリート敷設のためのものである。

・Ⅱ（８～15層）近世・近代か不明確

11層は瓦片が多量に包含されている。瓦はいずれも細片であり、登城路中に位置することから、江戸期の層ではなく、近代廃城後のものと考えられる。12～15層は礎石設置（移動）のための掘削層である。12～14層は２～５㎝程の緑色凝灰岩の砕片で構成されており、周囲とは明らかに異なる状況を呈している。

・Ⅲ（16～19層）幕末期の生活面

16～18層は溝の堆積層であり、底部部分にあたる18層には１～２㎝の玉石がみられる。19層は江戸期の路面と考えられる。

・Ⅳ（20～31層）嵩上げ後の掘削（礎石地業）

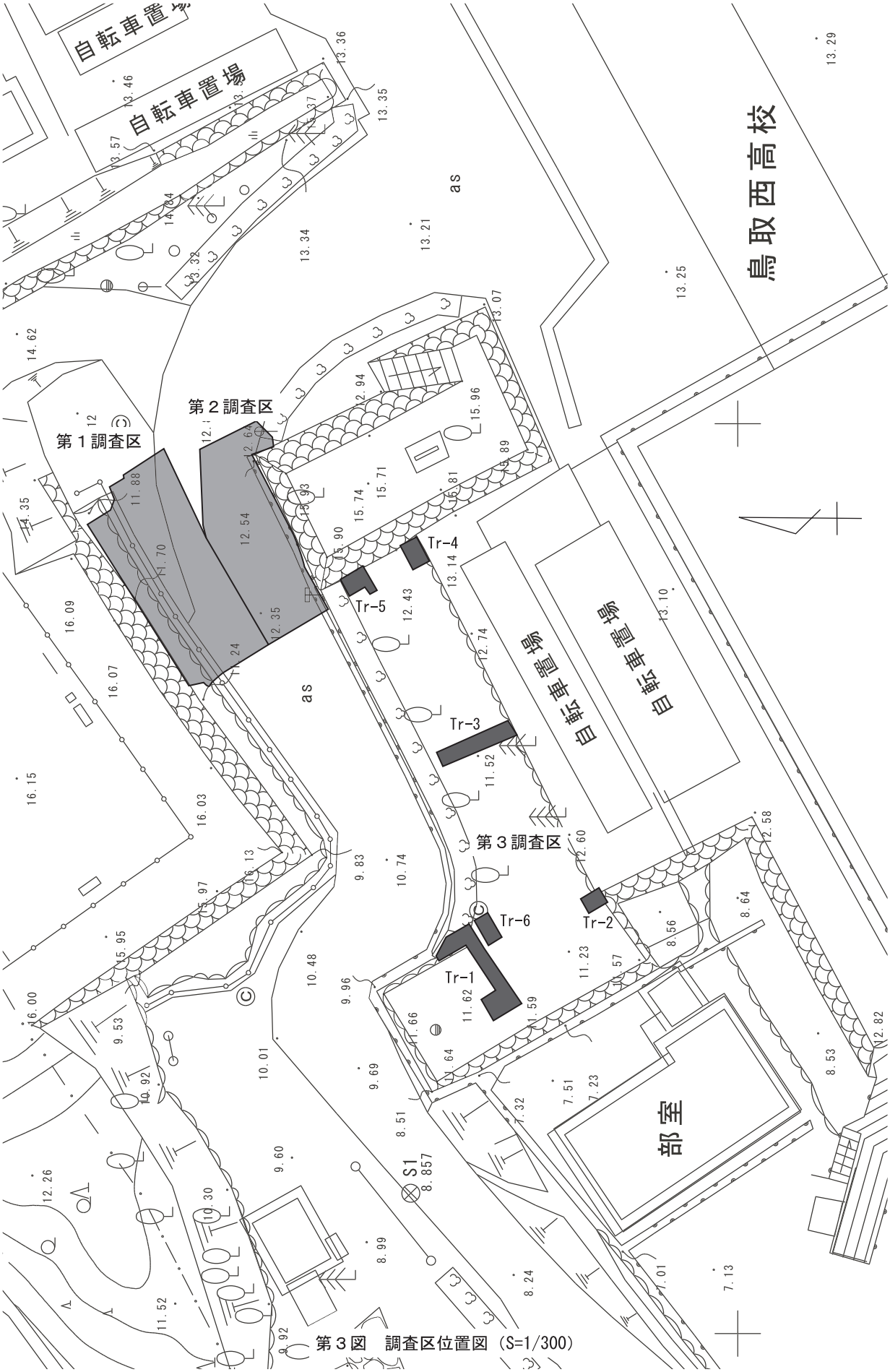
いずれも後述する嵩上げ土を掘り込んだ層であり、門礎石を据えるための掘り込み地業層である。20層は標高12.3m付近より掘り込まれており70㎝程度掘り下げた位置に長さ80㎝程の表面が平らな石が置かれている。21・22層はコンクリート溝の敷設により、大部分を失っているものの、浅い掘り込みがみられる。23層には20～30㎝程度の石が多く包含されており、礎石の下部を支える根固め層であると考えられる。

・Ⅴ（32～36層）嵩上げ層

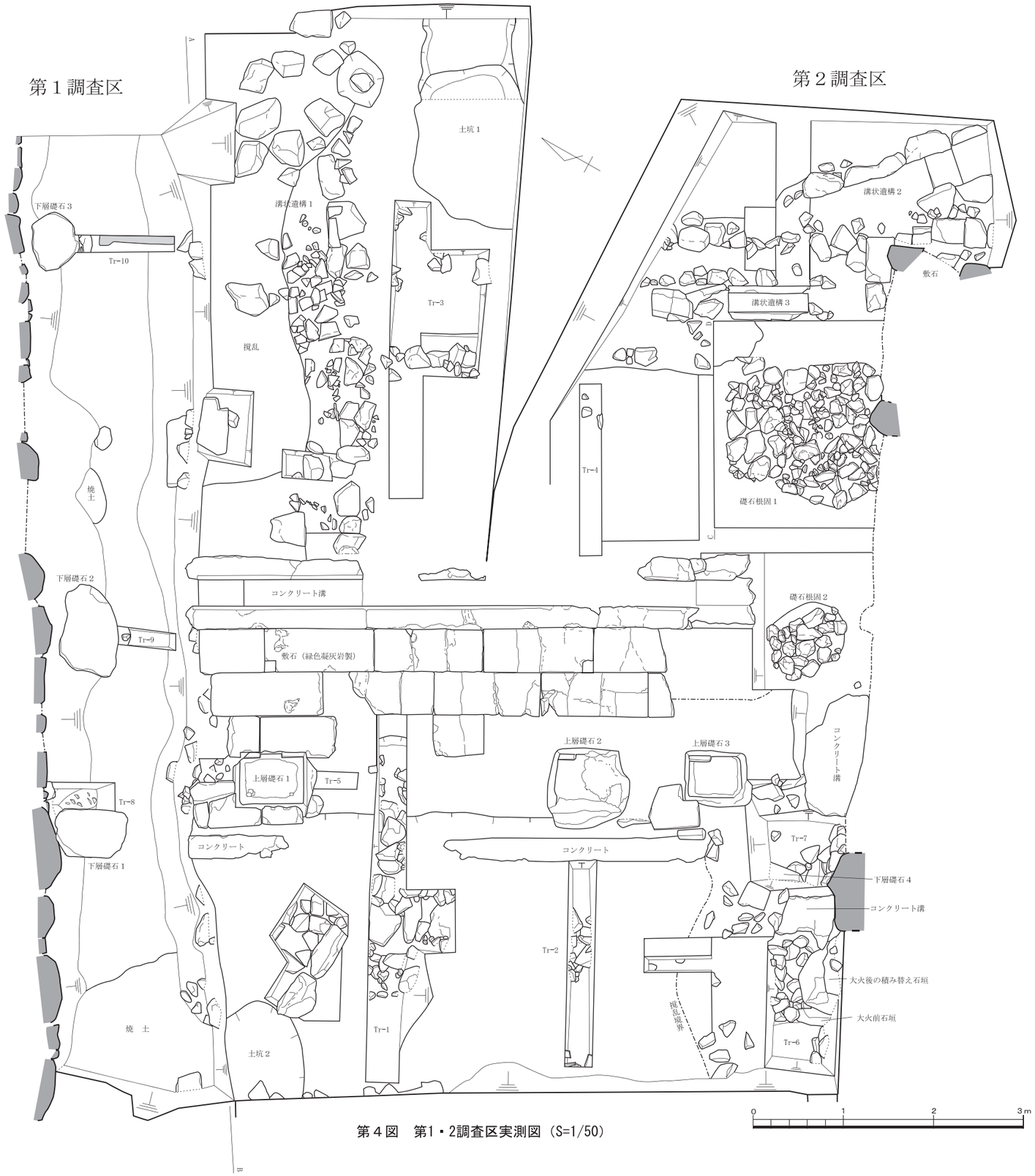
34～36層はほぼ同質であり、石黒大火（1720年）後に70～80㎝程度の土で一度に嵩上げが行われていることがわかる。

・Ⅵ（37・38層）1720年石黒大火以前

37層は粘性のある土であり、上面には広く焼土層がみられることから大火時の生活面であったと考え



第３図　調査区位置図（S=1/300）



第４図　第1・2調査区実測図（S=1/50）

られる。第13図C-D断面５層は大火以前の太鼓御門礎石の設置のための掘り込みであり38層でもある地山を掘削したものである。

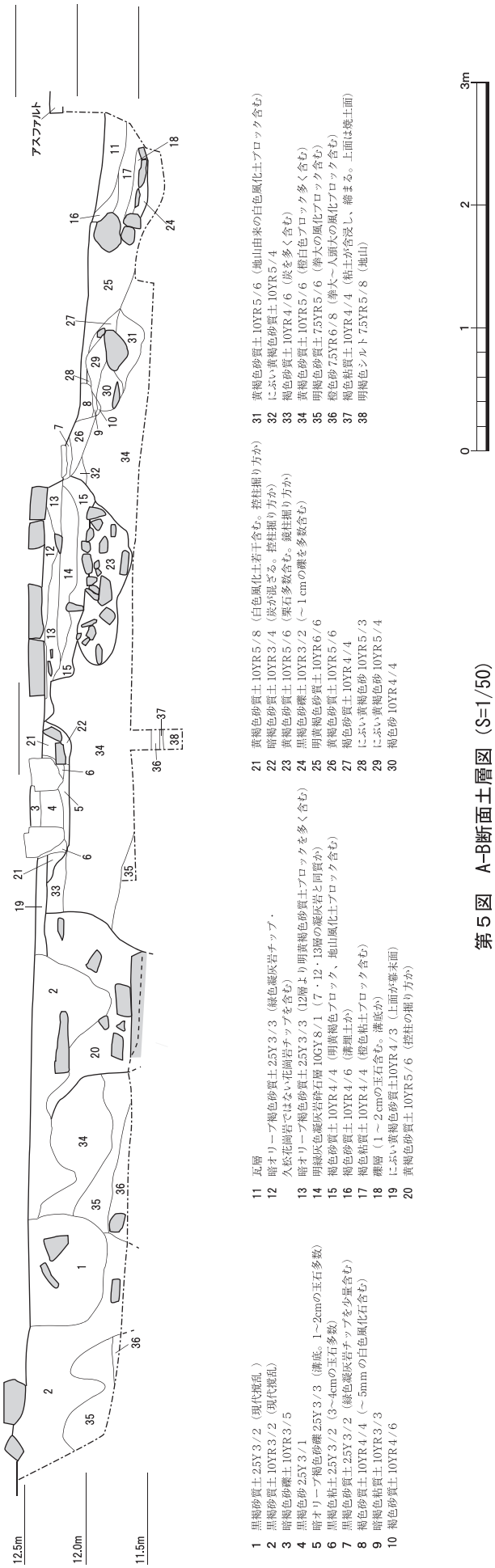
上層礎石（第６図）

１～３の並列する３石を確認した。礎石の材質は石垣にも使用されている久松山系から産出される通称久松花崗岩である。元々は太鼓御門の礎石として使用されていたが、明治期に鳥取一中の正門柱の礎石として再利用された際、現位置へ据え直されたと考えられる。本来は礎石１の北西側にはもう１石あり４石並列であったが、石垣修理工事の際に抜取られ現地近くで保管されている。上面の標高はいずれも12.4ｍと、ほぼ水平であった。中央の２石が鏡柱の礎石と考えられるのに対し、残りの２石はやや小さいため脇柱の礎石であろう。また、門柱に転用された際に上面にはコンクリートが塗られたため本来の平面形を確認することはできない。

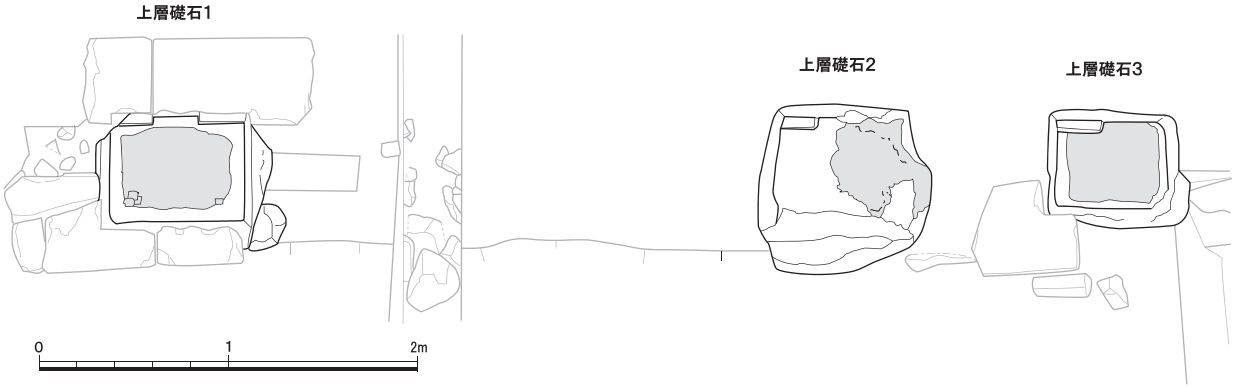
上層礎石１

平面径は74×92㎝、厚さは35㎝以上を測る。上面の規模は56×60㎝であり北東部については凸字形に加工されていた。門礎石に転用された際、門扉の開閉のための加工と考えられ、北東側１ｍの敷石中にある正方形の穴は門扉止のものであろう。

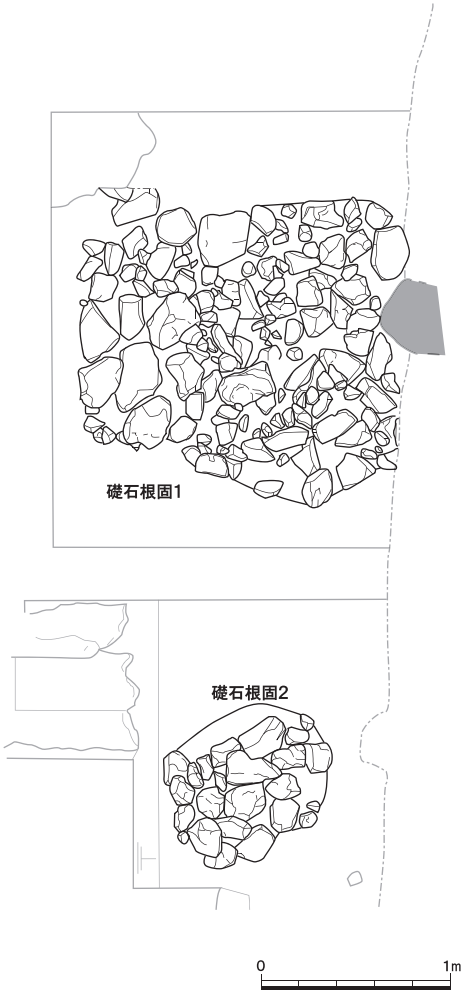
A-B土層断面ではこの礎石を据えた際の掘り込みと考えられる層（12～15、23層）が検出された。大火後の嵩上げである34層を掘り込んだもので現時点では12～15層は近代、23層は近世と考えた。本来、23層のように掘り方内に栗石を詰め根固めした上に礎石を据えていたと推定されるが、近代の門礎石再設置時に12～15層が掘られたとみられる。この場合、礎石の移動範囲は狭く元の位置から数十センチ程度となる。



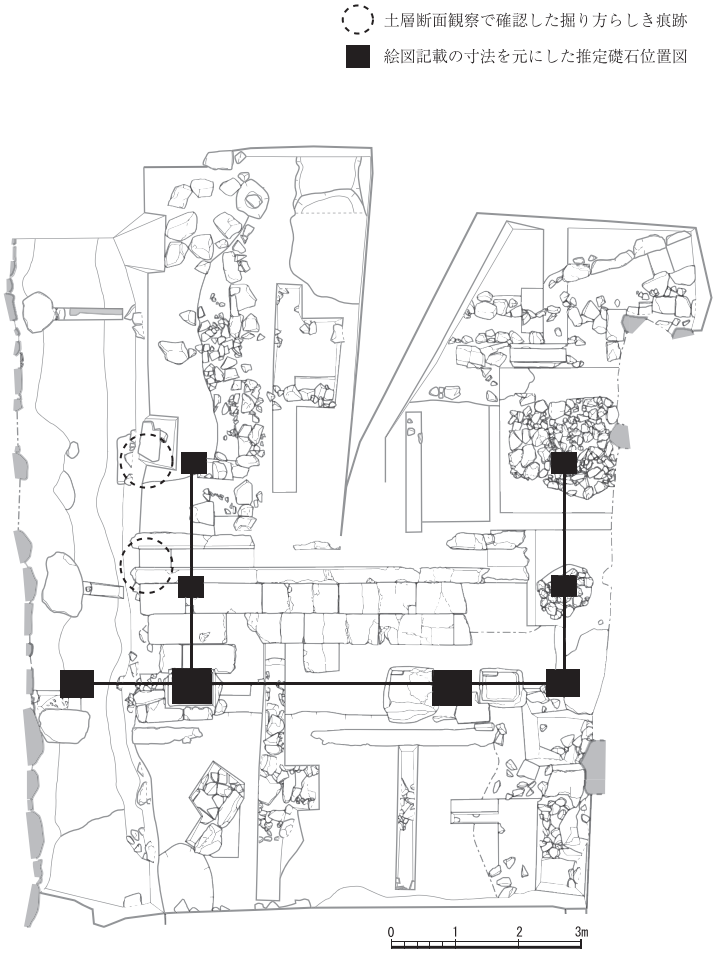
第５図　A-B断面土層図（S=1/50）



第６図　上層礎石実測図（S=1/40）



第７図　礎石根固め実測図（S=1/40）



第８図　柱想定位置図（S=1/120）

※礎石根図１凹部を控柱芯とした場合の想定

しかし、12～14層のように凝灰岩の砕片を敷く工法は特殊なものであり、Tr-７でも同様の状況が確認された。

上層礎石２

上層礎石１の南東3.5m、上層礎石３の北西1.5mに位置し、平面径は90×92㎝、厚さは30㎝以上を測る。礎石に塗られたコンクリートは厚く、南西辺を欠くことから、上面の正確な寸法は不明ながら現状で50×60㎝程度を測る。コンクリートが付着しているため半分程度の露出であるが、上層礎石１と同様に凸状の加工がなされており、背後に１mの地点の敷石も加工されていた。

上層礎石３

先の２石と比べやや小形であり、平面径は62×76㎝、厚さは30㎝以上、上面は50×60㎝を測る。他の２石とは北東辺を揃えており、鍵型の加工がされている。上面のコンクリートの上にはアスファルトが付着しているため全体に黒変している。当礎石は後述する礎石根固め石群上にあった礎石と列を成していたと考えられるが、想定位置より門中央部に寄って位置しているため、原位置からの移動が考えられる。

礎石根固（第７図）

上層礎石３の東側２箇所で検出した。根固め１は1.6×1.7mの方形気味の平面形を呈し、拳大から人頭大以上の大型の石が多量にみられ、被熱により赤変したものも多く含まれている。断面をみると中央付近が窪んでおりこの位置に礎石が据えられていたと思われる。上層礎石１の下の23層の状況に近いと考えられ、嵩上げ土に掘り込み地業を行うことで地盤強化を図っている。

礎石根固２は90×90㎝を測り楕円形状を呈す。礎石根固１と比べ規模は小さく、直上にコンクリート溝がつくられていたため、東側は既に失われている可能性がある。窪みもみられないため、実際どの位置に礎石が据えられていたかは不明でるが、礎石根固１との並びを考えると中央付近が想定される。

両者の距離は中央部で2.5m、規模こそ違うものの絵図面との比較から控柱の存在が想定される場所である。先述のとおり石群の中心に柱が位置していたとすると、前面にあたる上層礎石３は現在よりも南側石垣寄りの場所に位置していたと思われる。

また、A-B土層中で礎石の掘り込み地業の可能性がる掘り方を２箇所（20層、21・22層）確認した。

20層は上層礎石１から北東側3.5mに位置している。上部を２層により撹乱されているため、平面プランは不明であるが、断面形から考え直径1.5mほどの規模が推定される。地表下10㎝、標高12.3mから石黒大火後の嵩上げ層である33～36層を掘り込んでおり、深さは80㎝以上に達する。掘り方内には栗石が散在しており、標高11.6mには長さ80㎝ほどの平らな石がみられる。掘り方の底付近にあるこの石は、地表に出ていた礎石を支えるための地盤強化として入れられたものであろうか。

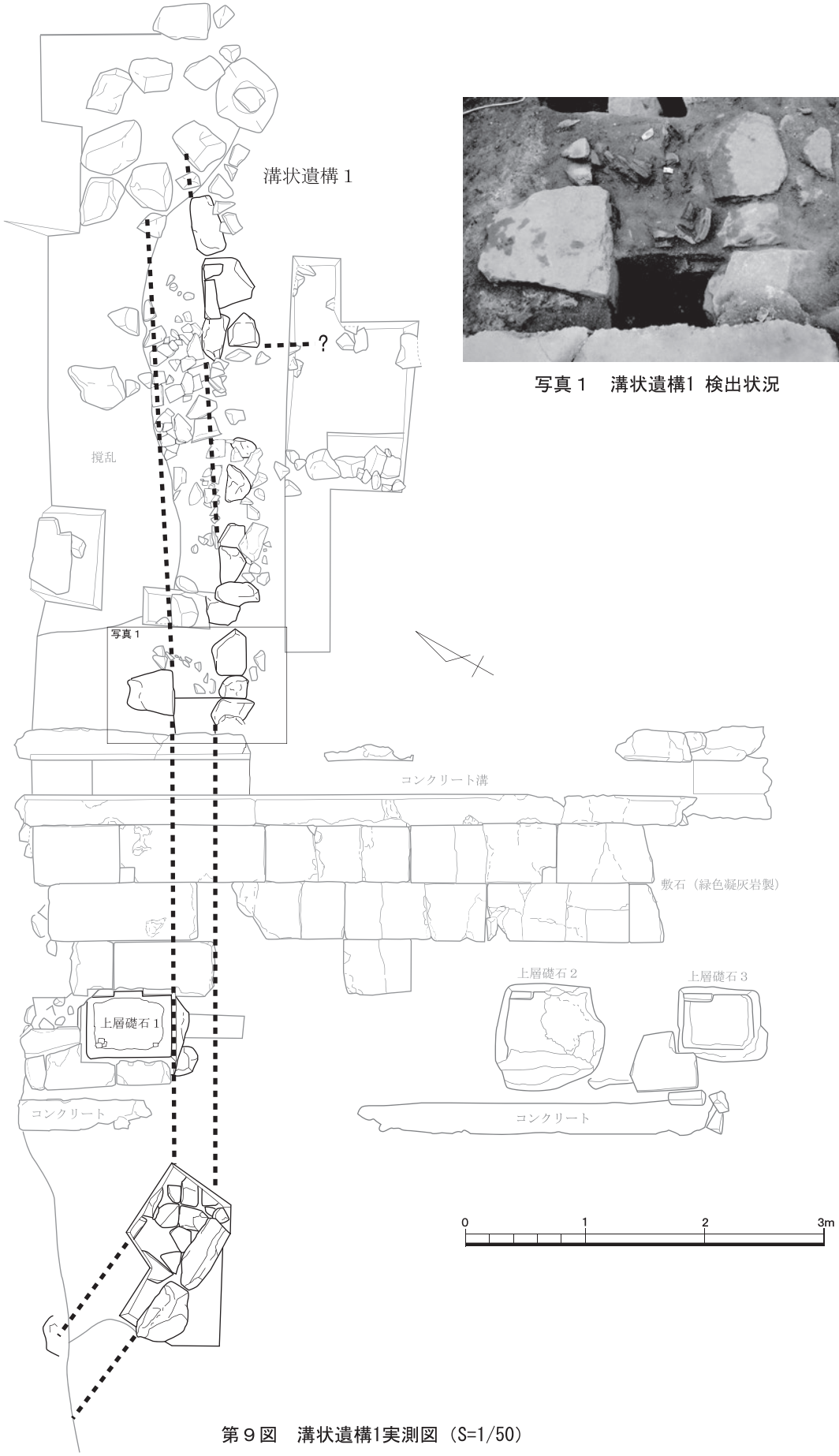
20・21層は上層礎石１から北東側２mに位置している。コンクリート溝により、その大半を失っているものの、溝脇にかろうじて一部を残している。残存規模は長さ1.3m、深さ20㎝であり、掘り方内には拳大の石がみられる。遺構の遺存状態が悪いため、これらを掘り込み地業と明言はできないもののその位置と形態より、可能性は高いと考えられる。

敷石（緑色凝灰岩製）

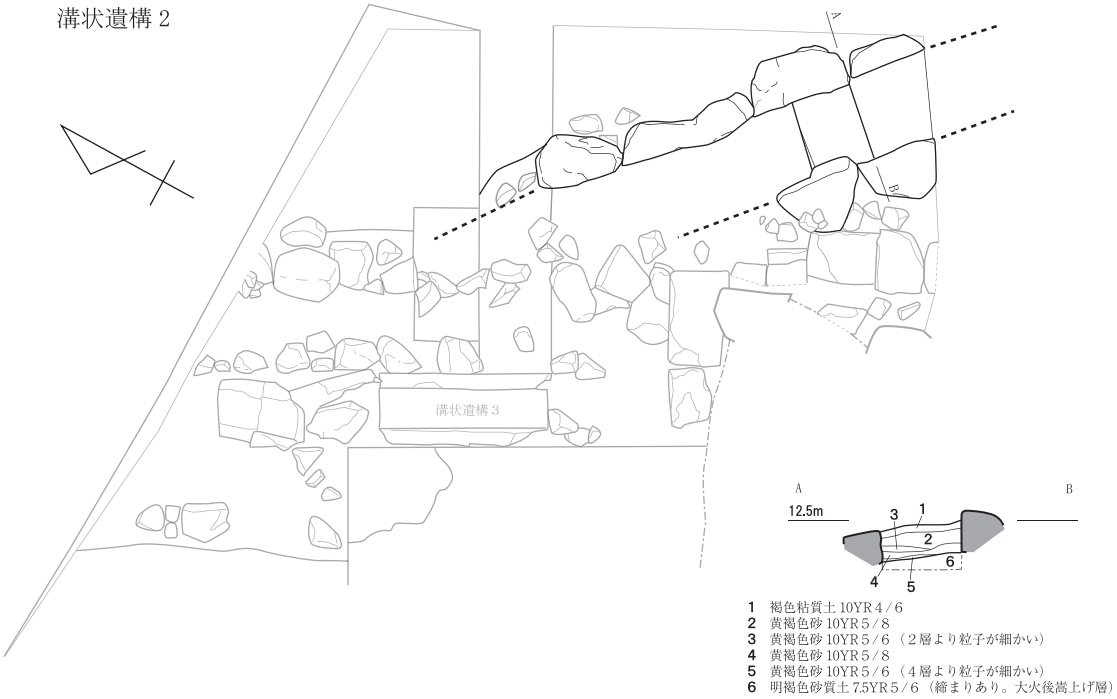
上層礎石を取り囲むように据えられている石材で、近代以降の学校整備に伴い敷設されたものと考えられる。本来は一面敷かれていたが後世の改変により多くを失ったと考えられる。敷石は緑色凝灰岩製で48×122㎝、厚さ12～15㎝の石材を主とし、上層礎石の周囲については、礎石の側面の傾斜に合わせた加工が施されている。石材表面はツルを用いた調整痕が残り、上面については平刃状の工具で平滑に仕上げ、側面部についても上面部付近の３～４㎝は点鑿調整、下部については斜め方向の筋鑿加工が施されており、可視部分のつくりは丁寧である。

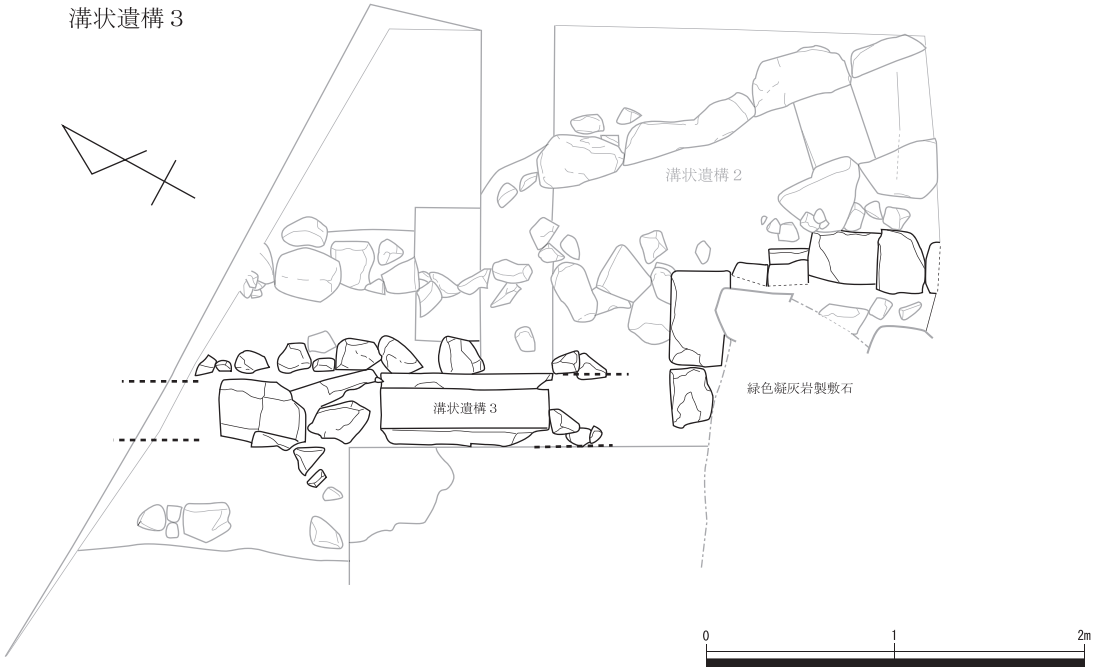
上層礎石１・２の中心から北東方向（後方）へ122㎝の地点では一辺13㎝の正方形に敷石をカットし

写真１　溝状遺構1 検出状況



第９図　溝状遺構1実測図（S=1/50）





第10図　溝状遺構２・３実測図（S=1/40）

た部分がみられる。礎石上に校門の門柱が立っていた際の門扉を止めるために石材加工を行ったと考えられる。

明治期以降の学校整備に伴い緑色凝灰岩が多用されている。鳥取城の北側1.5㎞、久松山の尾根伝いに進んだ地点にこれら石材の採掘場が点在しており、加工が容易なこともあって多用されていたようである。江戸期にも城内で使用されたとの記録もあるが、具体的にどこに用いられていたかは不明確である。敷石は後述する江戸期のものと考えられる溝状遺構１に被る形で敷かれており、また、下部には近代の掘削が及んでいる可能性があるため、近代以降の敷設と捉えた。

溝状遺構１（第９図）

第１調査区を縦断する溝状遺構で、後世の撹乱によりその大半は失われているものの、推定部分を含める全長9.5mを測る。直径30～40㎝程度の石を対面させて構築した溝であるが、遺構の遺存状態は極めて悪く、対で検出できた部分は、調査区中央付近のコンクリート溝際のわずかな部分だけであった。このかろうじて遺存した部分では溝の内寸35㎝、外寸105㎝、深さ30㎝を測り、底部に敷石等は見られなかった。コンクリート溝より北東側については南列の一部が残るものの、北列については、近代の工事等による大きな撹乱の影響で残存していない。調査区際の撹乱土内には直径40～70㎝程の大きさの石が散在しているが、形状からみてこれらは本来溝の側石であったと可能性がある。

中央のTr-３付近では列が途切れた部分があり、第２調査区方向へ向かい石が散在し、溝ではないが、石が並んでいるようにみられる部分もある。本来は溝状遺構２へつながる溝が存在していたが、後世に抜取られたとも推定できる。

また、この付近では掌大ほどの瓦片が溝を埋めるように検出された。燻しの桟瓦が中心であり、数点ではあるが釉瓦も含んでいた。後述するが出土瓦には刻印されたものが含まれており、文化年間子の年(1804・1816）製と推定される「文子」の文字が書かれていた。瓦群は一度に投棄されたような状況であり、時期としては明治12年までに完了した鳥取城解体時が想定できる。溝際には従来、太鼓御門に付属する形で番小屋が建っていたっため、瓦はこれらの建物に使用されていたもので、溝は雨落を兼ねていたと推定される。

一方、南西側では東西方向へ伸びる石列を検出した。東側はすでに撹乱され、西側は土坑２に切られているが、西側の土層断面では土坑２の下に残る溝の続きがみられる。規模は内寸40㎝、深さ20㎝を測り、底部には石が敷かれていた。先の溝の延長上に位置しており本来は礎石のすぐ横を通り門の全面部分へ流れる溝であったと考えられる。

溝状遺構２（第10図）

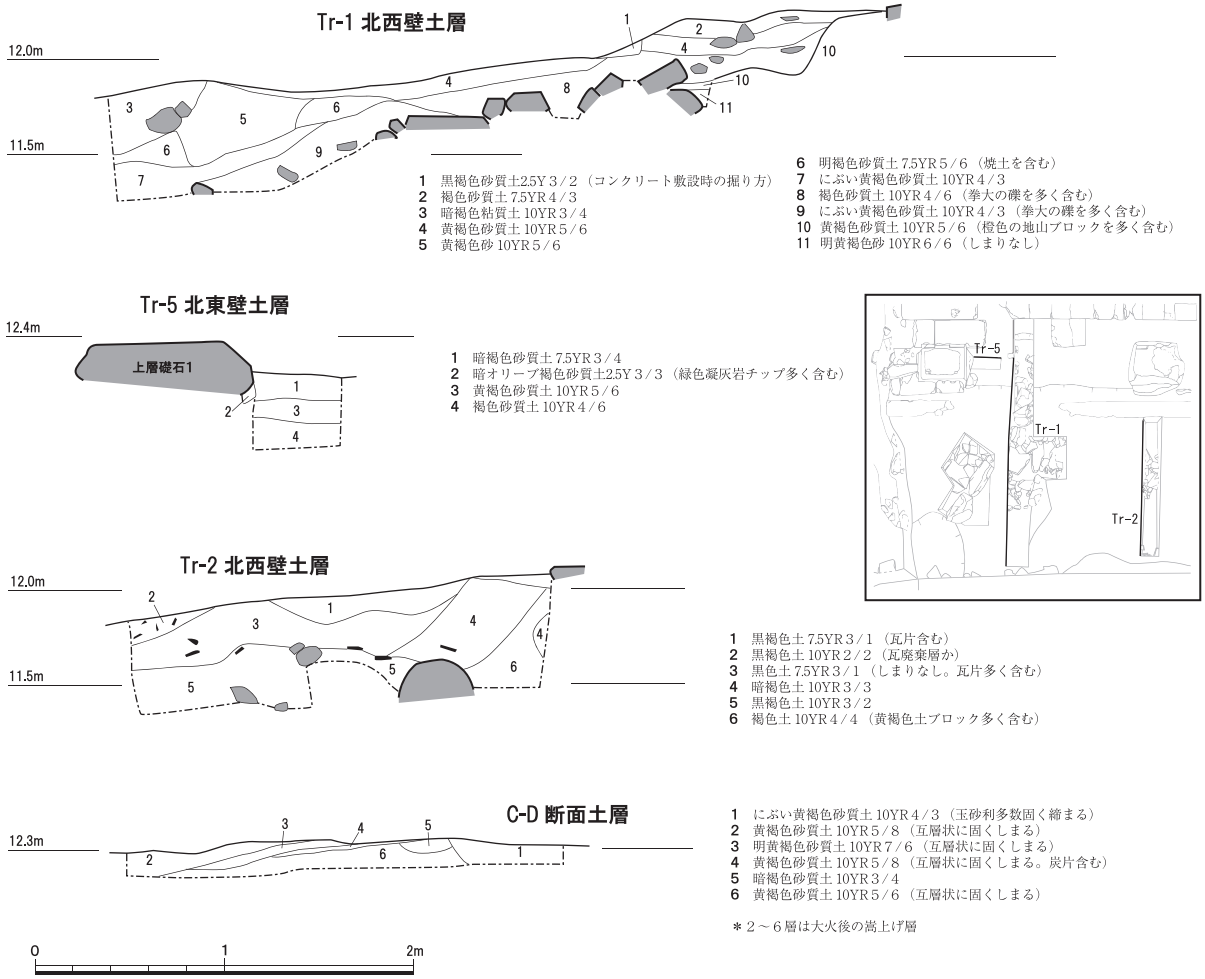
第２調査区の東隅付近で検出した南北方向に伸びる江戸期の溝状遺構である。溝状遺構１と同様石材を対面させる形状のもので残存長は2.2m、内寸40㎝、深さ30㎝、底部に敷石はなかった。他同様遺存状態は悪く、溝の両側とも残る部分はわずかであった。周辺に石材が散在していることから、近代の撹乱により石が抜かれたと考えられる。

江戸期の機能時は東側の城内からの水を西側に流していたと考えられるが、溝の西側は溝状遺構３によって切られているため、本来の流路は不明である。また、延長線上には溝状遺構１の側石があるため、両者が接続していたとすると途中で角度が変わっていたと推定される。

溝状遺構３・緑色凝灰岩製敷石（第10図）

第２調査区東側に位置する近代の溝である。緑色凝灰岩を「コ」の字形に刳りぬいたU字溝状の溝で、幅40㎝、長さは80㎝を一単位として連結して使用していたようである。溝の外側には支えと見られる人頭大の石が並んでいる。溝状遺構１の方向へのびるものの、石材は抜かれているようでTr-３では支え石の続きとみられる石がわずかに残るのみである。

調査区東側、石垣裾回りでは緑色凝灰岩を用いた敷石を確認した。石垣裾を廻るこの敷石は、一辺が



第11図　Tr-1・2・5、C-D断面土層図（S=1/40）

30～40㎝程度の方形石材を並べたものである。角部の石垣（昭和30年代に積み替え）については敷石の上に直接積まれている。平成19年の調査でも同様の石垣裾を廻る緑色凝灰岩製の敷石を検出しており、敷石と石垣との間を溝としていたため、溝の側壁としてとらえた。今回の敷石も一連のものであるならば、本来石垣との間にあった溝部分を覆うように積み替えされたことになる。

C-D断面土層（第11図）

嵩上げ層である２～６層は、地形に合わせるように緩やかに傾斜しながら整地されている。

Tr-１（第11図）

上層礎石の前面に配置した長さ４ｍのトレンチであり、中央付近を一部拡張した。トレンチ内には大小さまざまな大きな石が多数みられる。石は中央付近まであり、南西側（下方）ではみられない。また、土層断面図の１～７層は近代の掘削層と考えられ、Tr-５や溝状遺構１付近まで及んでいることがわかった。この掘削により、現位置まで移動したとみられ、一部については形状から溝状遺構１を形成していた石の可能性がある。中央拡張部の標高11.7m付近には40㎝以上の表面が平らな石材が水平方向に３石並んでいる。太鼓御門目前であることからも、階段であるとの想定もできるが、石の形態が歪であることからも積極的には言えず、階段を含む構造物の一部であった可能性がある。

Tr-２

Tr-１の南東２ｍ、上層礎石２の正面に設定した長さ2.3mのトレンチである。Tr-１と同様で中央付近には石群がみられるが、配置に規則性はない。土層断面図の１～５層はいずれも近代の掘削と考えられ

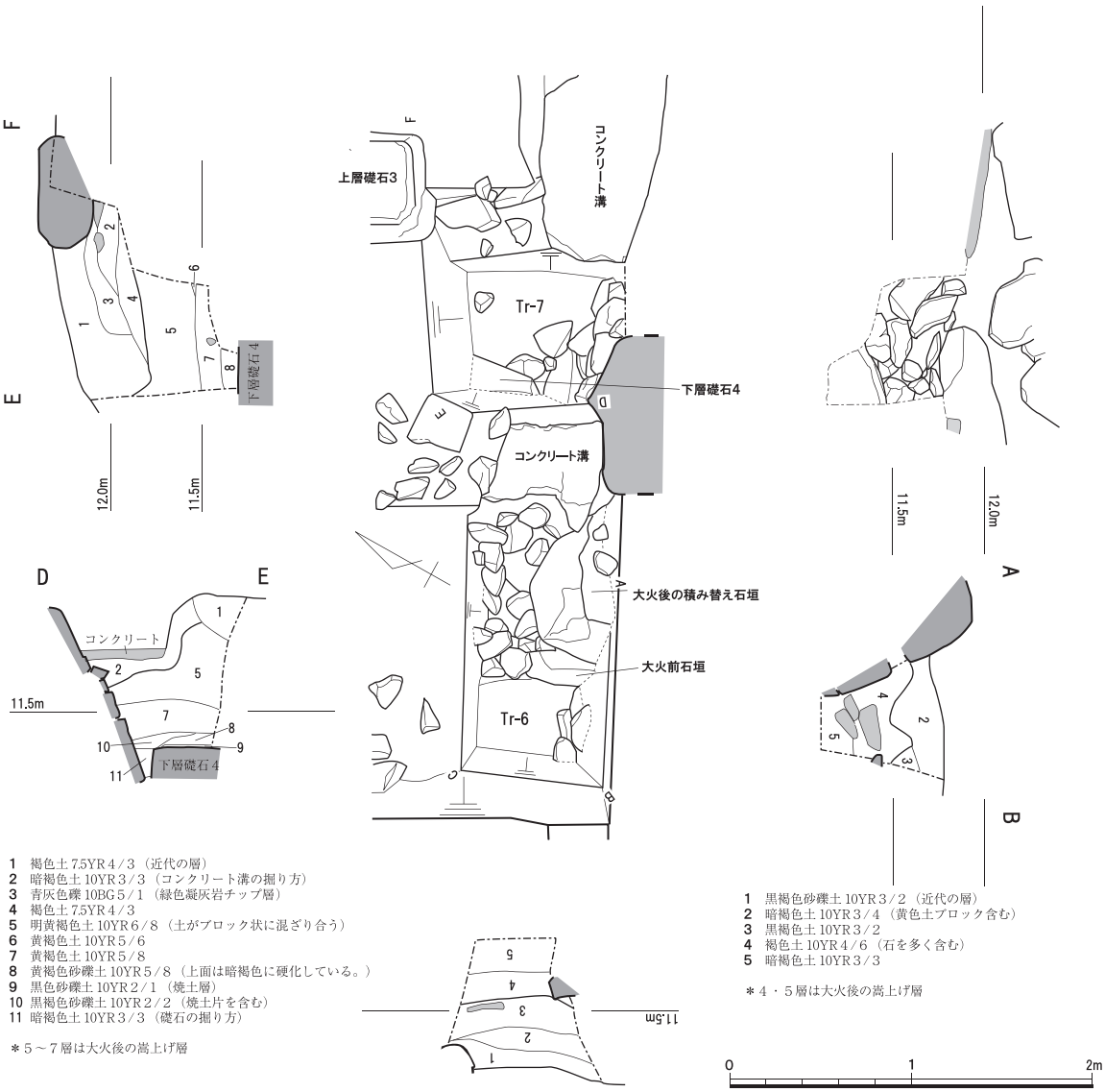
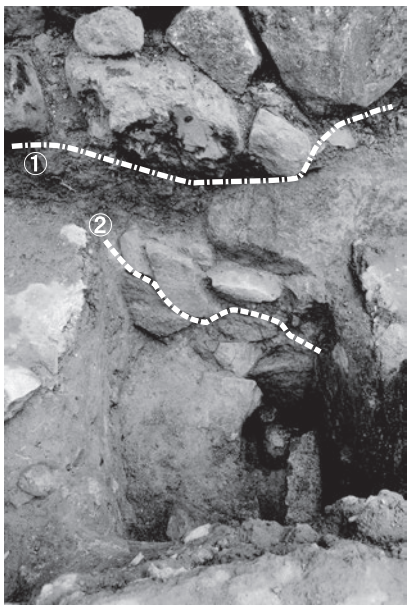


写真2　Tr-6

①昭和19年の鳥取大地震後の積み替え

②享保5（1720）年の石黒大火後の積み替え

写真3　Tr-7



第12図　Tr-6・7実測図（S=1/40）

るため、石群の性格は不明である。

Tr-３

Tr-１の延長上、溝状遺構１に並行した長さ3.3mのトレンチで南東方向へ40㎝ほど拡張した。拡張部では石列を検出したが溝と呼べるようなものではなく、第２調査区の溝状遺構３を押さえていた石列のような性格をもつのであろうか。溝状遺構３も本来はこの付近まで延びていたと考えられるが現存はしていない。また、拡張部の埋土は粘質土を含む褐色系の土であり何らかの水の作用があったと推定される。

Tr-４

Tr-２の北東方向延長上に設定した長さ1.9mのトレンチである。礎石の裏手、控柱跡の検出する目的であったが、５㎝ほど下げても土層に変化はなかったために掘削をやめた。トレンチおよび周辺にみられる黄色系の土は石黒大火後の嵩上げ層であり、調査区内で面的に確認できる場所でもある。

Tr-５（第11図）

上層礎石１の南東方向に設定した40㎝のトレンチである。確認された水平堆積の土層はTr-１と一連の、近代撹乱が及んでいることが確認できた。また、礎石の下部（２層）にはA-B面12～14層で確認した緑色凝灰岩の砕片を敷いた層である。

Tr-６（第12図）

調査区南隅、石垣の隅角部の下部に設定した80×140㎝のトレンチである。石垣には標高11.5m（石黒大火後)、標高12.2m（昭和30年代）の２度の積み替えの跡を確認した。最下段の石は被熱のため表面が赤変しており、石の上面には本来上部に積まれていた石の接地ラインが焼けずに残っている。焼けた石垣は他の下層礎石のレベルとほぼ同じであるため石黒大火による被熱であると考えられる。直上の石に被熱の痕跡がみられないことから、この石を境にして大火後石垣の積み替えが行われたようである。

積み替えられた石垣であるが、1943（昭和18）年の鳥取大地震により、現調査区側の石垣は完全に崩壊することとなり、現在の姿に積み直されたのは昭和30年代後半の学校改築時になってのことであった。標高12.2mより上がその際の石垣であるが、積み直しは崩壊していない下層の石垣上ではなく、地震後堆積した土砂上におこなっているため石垣間には20～30㎝程度の開きがある。石垣周辺には拳大の栗石が多くみられる。石黒大火後の石垣積み替えと地盤嵩上げの際に入れられたと考えられるが、地盤強化の意味合いがあるのであろうか。被熱した石は大火時まで露出していたとすると、石垣はまだ下層へと続くと考えられるが、現状では確認できず、トレンチの制約上掘り下げは地表下80㎝、標高11.1mまでとした。

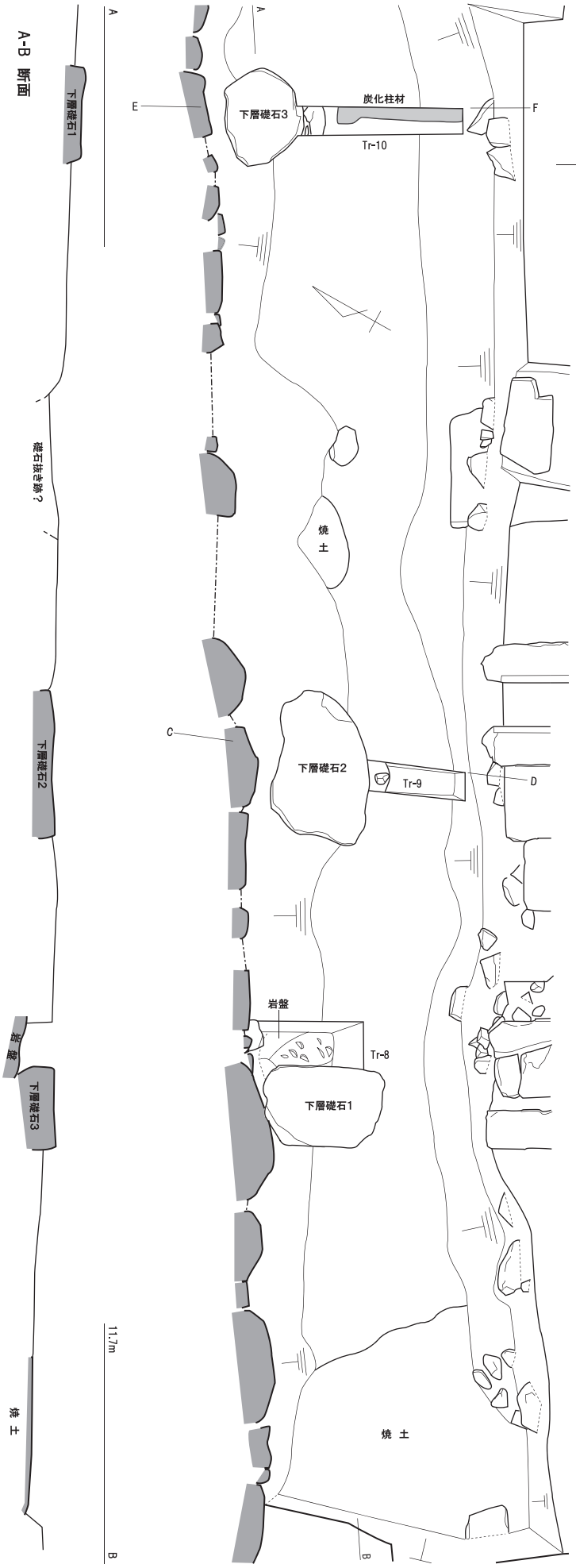
土層は１～３層が近代以降の撹乱層であり４・５層は大火後の撹乱層である。４層の上面はやや削平を受けるものの大方幕末期の地盤面であると考えられ、トレンチ北西側のわずかな部分に残っているだけであった。なお、土層中で石黒大火の痕跡は確認できなかった。

Tr-７・下層礎石４（第12図）

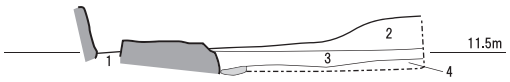
Tr-６の東側に隣接して設定した120×120㎝のトレンチである。Tr-６同様、石黒大火後および地震後の２度に渡る石垣積み替え跡を確認した。石垣下部には比較的大きな石があり、直上の数石とともに被熱により赤変している。この焼石は標高11.8～11.5mの間に残っており、これらの上には被熱していない石垣が築かれている。両者は組み合った状態で確認されており、大火後の積み直しと考えられる。さらにその上方では標高12.0m付近で土の層を15～20㎝ほど挟み、昭和30年代の積み直し石垣が存在する。

トレンチの西隅では下層礎石１と対をなすと考えられる下層礎石４を検出した。礎石は上面の標高11.3m、石垣に近接した位置に据えられており、平面規模は不明であるが、厚さは20㎝以上ある大型の石材である。下層礎石１の上面レベルが標高11.36mであるため、両者はほぼ水平であることがわかる。

１～５層は近代の撹乱層、６～８層は大火後の嵩上げ層である。上層礎石３の下部には上層礎石１と



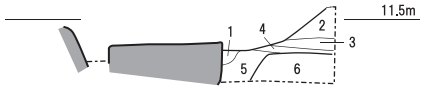
E - F 断面土層



1　撹乱
2　橙色砂質土 7.5YR 6／8（橙白色ブロック多く含む）
3　褐灰色粘質土 7.5YR 4／1（拳大～人頭大の風化ブロック含む。上面硬化）
4　黒色炭化物 10YR 7／1（炭化した柱材）

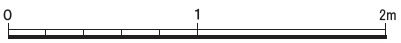
＊2層は大火後の嵩上げ層
2層は第5図 A-B 土層断面図中の 34 層、3層は 36 層、
4層は 37 層と対応

C - D 断面土層



1　撹乱
2　黄褐色砂質土 10YR 5／6（橙白色ブロック多く含む）
3　橙色砂7.5YR 6／8（拳大～人頭大の風化ブロック含む。上面硬化）
4　褐色粘質土 10YR 4／4（粘土が含浸し、締まる。上面は焼土面）
5　明褐色粘質土 7.5Y 5／6（礎石掘り方）
6　明褐色シルト 7.5Y 5／8（地山）

＊2・3層は大火後の嵩上げ層
2層は第5図 A-B 土層断面図中の 34 層、3層は 36 層、
4層は 37 層、6層は 38 層と対応



第13図　下層礎石周辺実測図（S=1/40）

同様に緑色凝灰岩の砕片を敷いた青灰色の層（３層）がみられる。６～８層の嵩上げ土は他同様黄色系の土色である。

Tr-８・９・10および下層礎石（第13図）

調査前は溝となっていた場所である。下層礎石は、以前石垣の解体修理中に偶然発見され、真砂等で保護されていたのを、今回改めて調査したものである。

下層礎石１～３の規模は１が53×81㎝、２が65×103㎝、３が52×62㎝であり、表面のレベルはそれぞれ11.35m、11.34m、11.55mである。また、据付状況を確認するためにTr-８～10を設定した。３石とも被熱により、表面が赤変している。また、周辺石垣も赤変し、周囲に焼土もみられることからら、これらは石黒大火の痕跡と考えられる。

礎石を比較すると１と２は表面がほぼ同じレベルであることから大火前の太鼓御門礎石と考えられ、20㎝高い位置にある３は門の裏手に隣接する建物の礎石であった可能性がある。なお、１と２の距離は中央で2.3mである。また、２から３側へ2.3mの地点には半円状に地山が抉れた箇所があることから、現存しない礎石があった可能性は否定できない。

Tr-８では礎石下20㎝で工具痕の残る岩盤を検出した。岩盤を加工し、その上に直接礎石を据えることで安定性を得ていたと思われる。

Tr-９では礎石が地山である６層を掘り込み設置されていた。地山直上である４層の表面は炭を多く含む黒色の焼土面が広がることから、この層が石黒大火前の生活面とみられる。さらに４層の上には厚さ７㎝程度の３層を挟み、嵩上げ土である２層が厚く敷かれる。３層の上面は一部硬化しており、広い意味では嵩上げ層の一部であるが、大火後から嵩上げまでの短期間の生活面の存在が想定される。

Tr-10の４層は炭を多量に含む焼土層である。この炭は焼失した柱材の一部とみられ、平面形ではトレンチに沿うように直線状に伸びている。この上層にはTr-９同様、上面が硬化した３層があり、さらに上には全く土質の異なる２層が敷かれる。

Tr-９・10の層位は非常に似ており、礎石の上面よりやや低い位置に焼土面があり、次に礎石の上面とほぼ同一の高さに生活面がみられた後、一度に嵩上げされている。大火前後の状況を知る上での好例となろう。

焼土

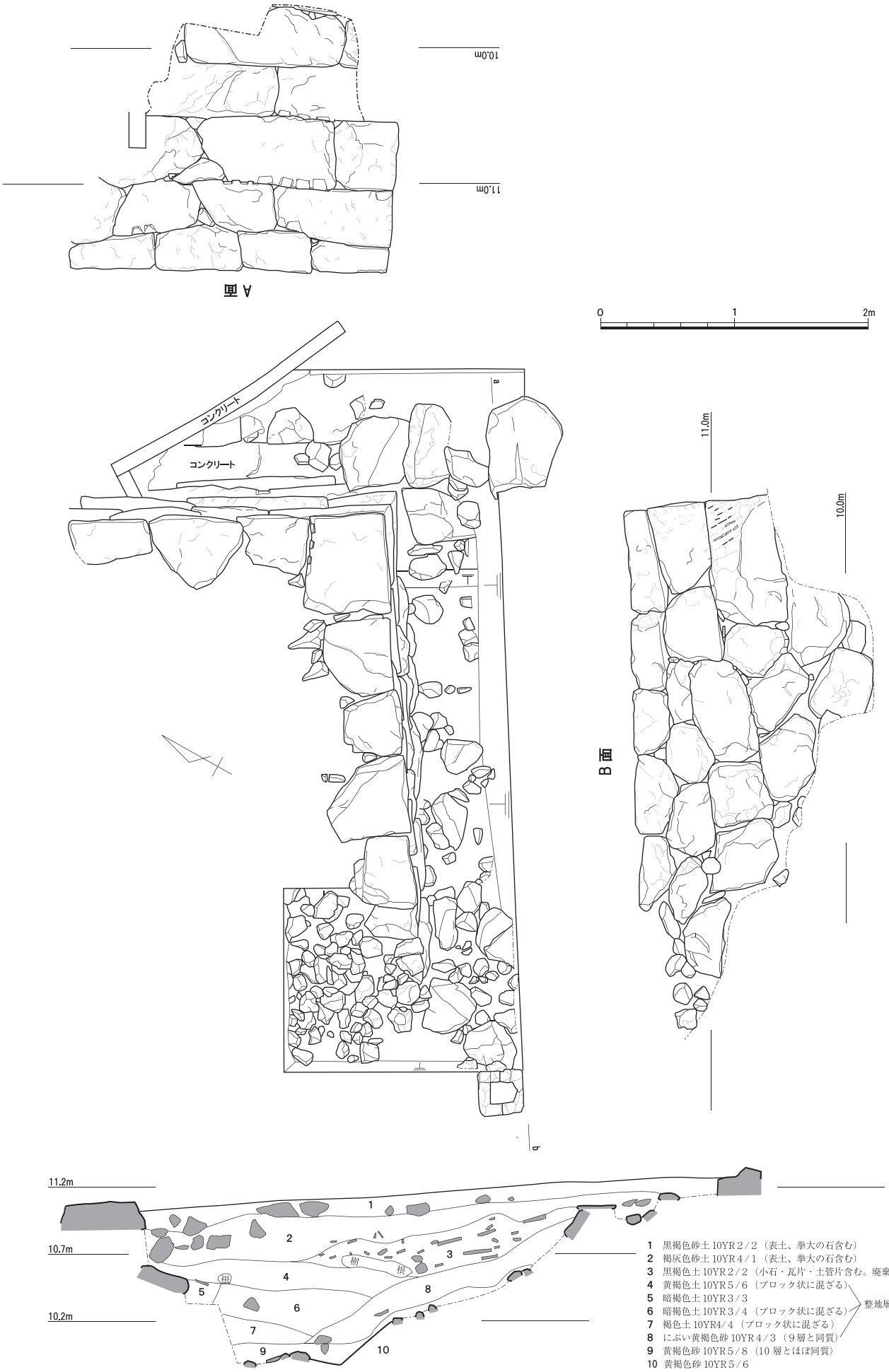
下層礎石１の南西と下層礎石２の北東の２箇所で平面的に認められた。Tr-９・10の焼土面と一連であり、旧地表面が被熱によって赤変したとみられる。面として広がってはいるものの、厚さは１～２㎝程度と非常に薄い。

土坑１

Tr-３の北東側、調査区１の隅から調査区外へと続き、現状での規模は1.2×2.3m、深さ15～20㎝を測る。溝状遺構の様相を呈し、内部には瓦の小片が多量に含まれている。嵩上げ土上面から掘り込まれており、登城路の中央部に位置していることからも、江戸期のものとは考え難く、明治期以降の所産と推定される。

土坑２

調査区西隅から調査区外へ続いており、現状で90×110㎝、深さ20㎝を測る。内部には瓦の小片が多量に入ったこの瓦溜は、溝状遺構１を切り込むかたちに位置している。土坑１と同様、廃城後の城解体にともなう瓦廃棄坑的な意味があると考えられる。



第14図　第３調査区Tr－１実測図（S=1/40）

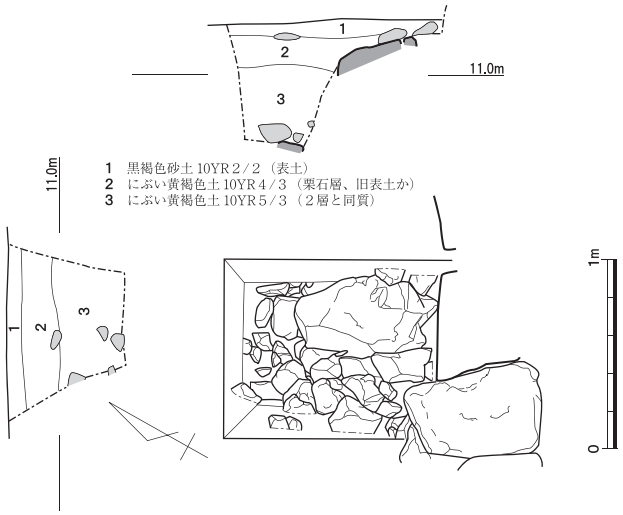
2　第３調査区

幕末期の地盤面を確認することを目的に６箇所のトレンチを設定した。

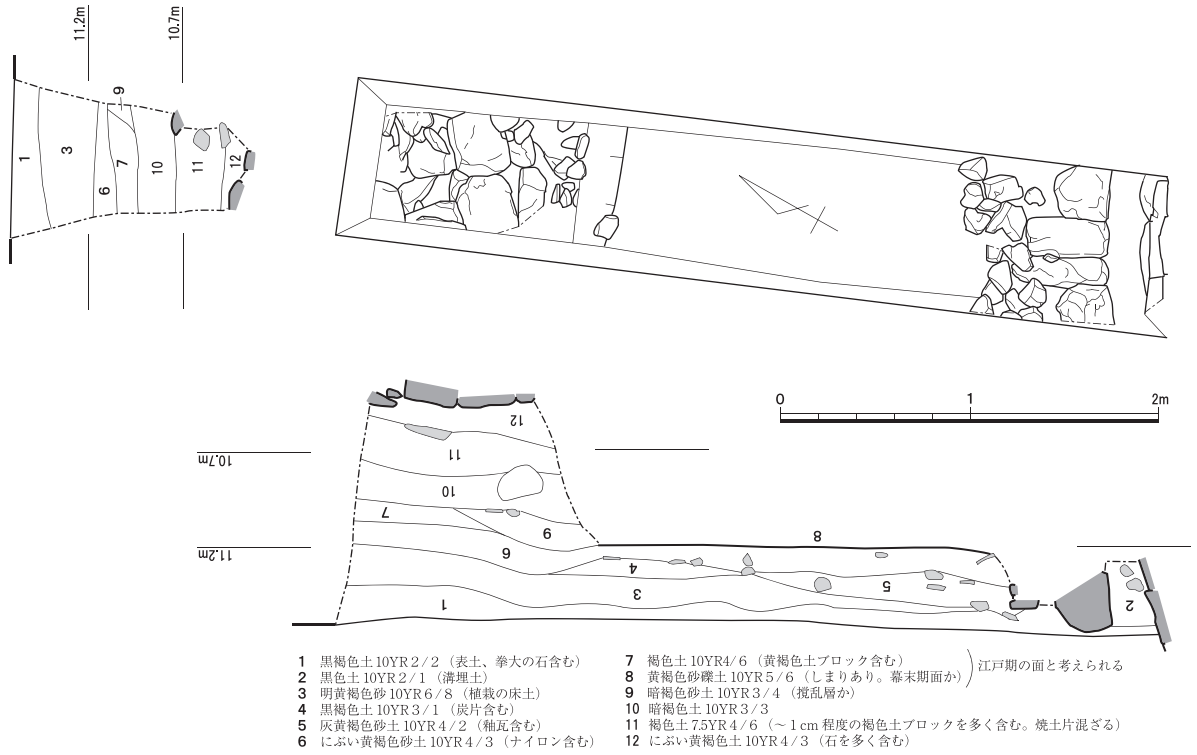
Tr-１（第14図）

外枡形を形成する石垣沿いにL字形に設定したトレンチである。絵図によると当張り出し部の太鼓御門側には広い階段が描かれており、階段裾から地盤面の確認をおこなう目的で設定した。当枡形は大手橋から登城路沿いに進んできた際、正面に位置する重要な場所であり、場内唯一の切石積みの精緻な石垣が築かれている。なお、外枡形の形状を呈するも門等が描かれた絵図はなく、石垣上に土塀が描かれるのみである。また、当石垣の外側部分は嘉永３（1850）年、地震被害の修復願が出されており、切石もこの時積まれたと考えられる。

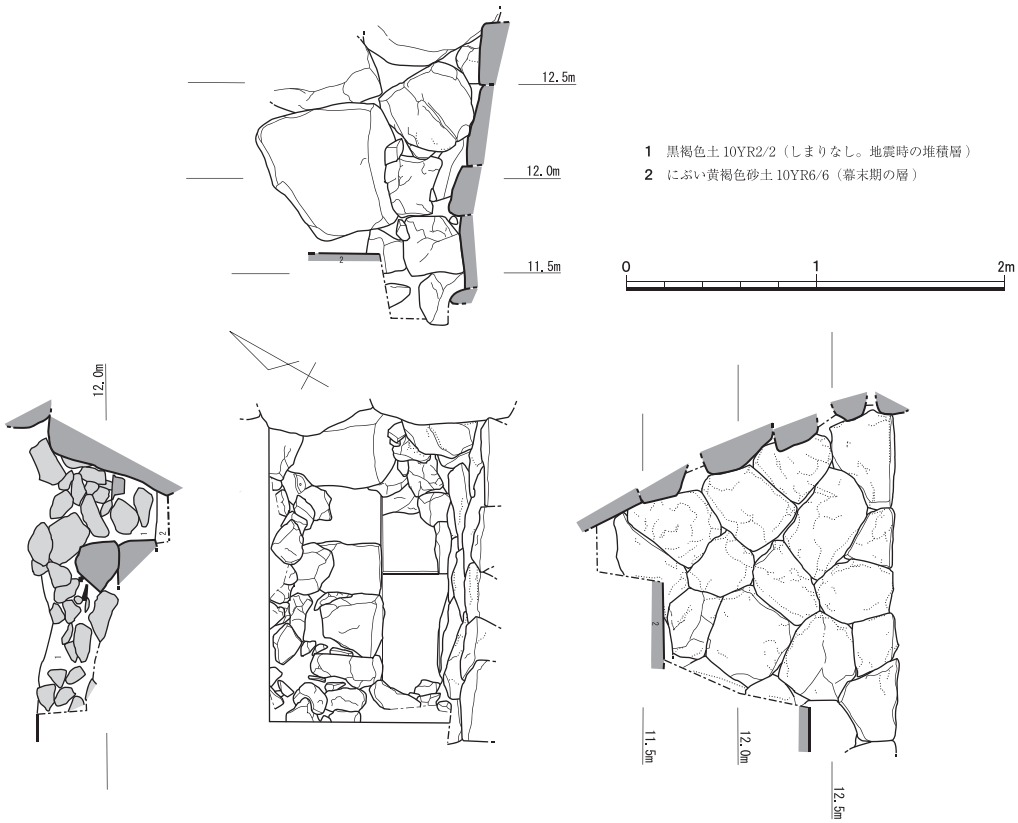
現状の石垣は上１～３程度が表出するのみで、大半は土中に埋没しており、調査では５段程度を検出した。A面は外側の石垣から続く一連の切石積み石垣で、石の表面には細かな工具痕がみられる。一方B面については、隅角部分こそ切石であるが、それ以外は自然石の形状に近い形であった。A面側では石垣と向かい合うように石を並べて溝として使用していたようである。溝の底部、標高9.9m付近にはコンクリートが敷かれているため近



第15図　第３調査区Tr-2実測図（S=1/40）



第16図　第３調査区Tr-３実測図（S=1/40）



第17図　第３調査区Tr－４実測図（S=1/40）

代の溝であることがわかった。コンクリートの下部標高9.7mには硬化面がみられ、石垣はさらに下層へと続いていた。調査区の制約上これ以上の掘削は行っていないが、この硬化面付近が幕末期の面であった可能性がある。B面石垣は階段状に築かれており、標高9.8mまで確認したが、隅角へ向かいもう一段程度下がると考えられる。あたかも石段が接地していたような様相を残すが、残存はしていない。

調査区南西方向トレンチ隅に隣接する方形の石は土塀の基礎とみられ石垣沿いに等間隔に配置されている。30㎝四方のこの石はコの字形の緑色凝灰岩を向かい合わせに据えたものである。この土塀は明治期の廃城・解体を免れたようであり、鳥取一中の写真でも確認できる。

土層断面の観察から１～７層は近代、８・９・10層は江戸期にさかのぼる可能性があることがわかった。B面側の天端石付近まで堆積していた土を掘り下げると、表面付近には大小様々な大きさの石を多量に含む１・２層を検出した。全体的に締まりがなく、客土であると考える。３層は瓦の砕片を多量に入る瓦層で、江戸期の燻瓦に加え若干の釉瓦も含んでいた。瓦の一括廃棄層のような状況を呈しており、明治期間で残存していた土塀を撤去した時の層であろうか。４～７層は整地されたような水平堆積の層である。８～10層は全く土質が変わり、固く締まった砂層である。石垣はこの緩やかに傾斜する層上に築かれており、堆積状況がやや階段状にもみえることから、上面に階段が存在していた可能性は否定できない。

Tr-２（第15図）

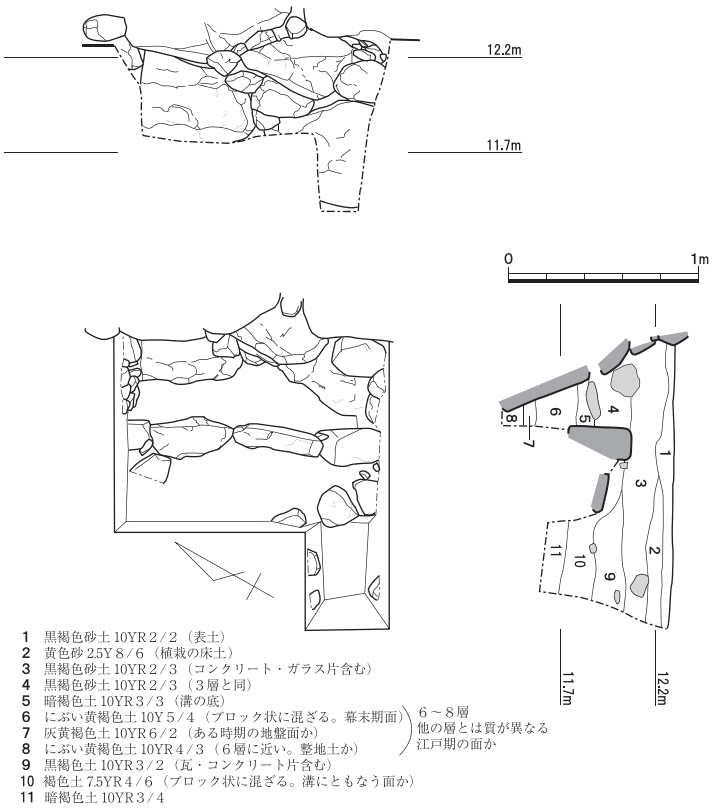
枡形石垣の付け根部分、３方向の石垣が交差する部分に設定した1.9×2.3mのトレンチである。３層を中心に石垣の裏込石が多量にみられた。明確な地盤面は確認できなかったが、２層の上面がそれであろうか。

Tr-３（第16図）

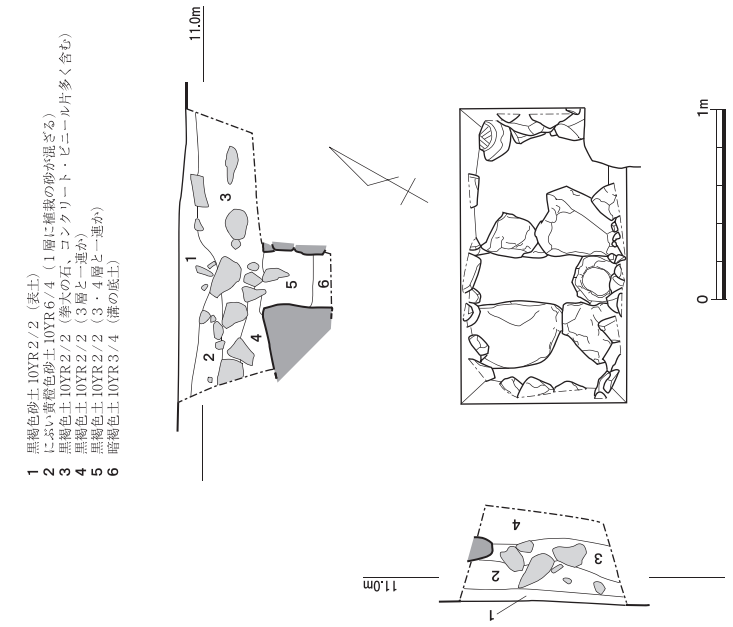
太鼓御門南側石垣から11m亀甲積の石垣から登城路方向へ向け設定した0.8×4.4mのトレンチである。石垣から40㎝ほどの位置には、溝と考えられる石垣に対して面を揃えた石列が残る。溝はTr-４・５に

も続いており近代以降のものと考えられる。溝石の頂部は標高11.65mを測り、ほぼ現地表面付近である。溝にともなう層としては５・６層が挙げられるが、やはり近代の遺物を含み、６層上面にはナイロン製品がみられることから１～４層については戦後の層と考えられる。標高11.2m付近の８層は上層とは土質か異なり、黄色系の締まった土が水平方向に広がる。

トレンチ北側では1.5m幅でサブトレンチを設定した。８層は圧さが10cmほどあり、９層に切られるもののやや傾斜して７層へつながるとみられ、後述のTr-４を勘案すると、この７・８層が幕末地盤面の可能性が高いと思われる。10～12層はほぼ同質の層で若干の炭が入り、12層下には40cm程度の比較的大きな石を含む石群がみられる。石の性格は不明であるがなんらの構築物の一部であり、10～12層は第１・２調査区でみられた嵩上げ層的なものであろうか。



第18図　第３調査区Tr－５実測図（S=1/40）



第19図　第３調査区Tr－６実測図（S=1/40）

Tr-４（第17図）

太鼓御門南側石垣裾の亀甲積石垣との接合部分に設定した1.0×1.5mのトレンチである。亀甲積みの石垣は太鼓御門石垣に接地して築かれており、天端から1.45m、標高11.35mで底に達する。石垣の築造年代の記録等はないが形態から幕末期が考えられ、Tr-１の外枡形石垣の修復願が出された嘉永期が想定される。石垣沿いにはTr-３と一連の溝があり、太鼓御門南側石垣裾へと折れて続く。溝の側壁は30cm四方の石材を２段積んでおり、角部の１石を失うものの深さ45cmを測る。溝の内部および上部には拳大の石を多量に含む１層がみられる。石とともにガラス瓶の破片や近代の遺物を多く含んでおり、昭和18年の鳥取大地震で太鼓御門石垣が一部崩壊した際に埋まったと考えられる。この場合、溝は地震の時点まで機能していたことになり、石群は崩壊時に流出した石垣の裏栗石であろうか。溝石はかなり締まった土である２層上に築かれており、Tr-３と同じ状況である。このことから２層が幕末期の面であり、溝は明治期以降

に作られたと考えられる。

太鼓御門側の石垣は、亀甲積み石垣の根石より深く、標高11.2mまでは確認でき、さらに下層へと続いている。第１・２調査区Tr-６・７で確認したような被熱した石や、石垣の積み替え跡は特にみられなかった。

Tr-５（第18図）

Tr-４の北西側、太鼓御門南側石垣裾部に設置した1.5×1.5mのL字形のトレンチである。石垣は標高12.3mの現地表面から90㎝、標高11.4mまで確認した。表土から20㎝ほど下がった位置からはTr-３・４と一連の溝を検出した。石垣から30㎝離れた位置に並ぶ石列は深さ30㎝を測り、先のトレンチと同様、幕末期の地盤面と考えられる６層上に築かれていた。６層の上面はTr-４とほぼ同じ高さの標高11.8mであり、厚さは20㎝を測る。

Tr-６（第19図）

Tr-１の南東側に設定した0.9×1.6mのトレンチである。標高11.1mの地表から40㎝、１～４層には拳大～人頭大の石が多量に入る。Tr-１の１・２層の状況とも似ており、位置や標高も近いため一連の層である可能性がある。また、石とともにナイロン袋を含んでいることから戦後の堆積と考えられる。４層下には石材を対面させて作った溝を検出した。溝石は１石ないし２石を積んで壁を成しており、深さは40㎝を測る。溝の向きより、Tr-１のA面壁際にみられたコンクリート底の溝につながるとみられ、Tr-３～５で確認した溝とも一連をなしていた可能性もある。

第Ⅳ章　出土遺物

遺物は、太鼓御門跡に該当する第１・第２調査区、及び周辺の第３調査区において瓦を中心に出土した。大半が細片であり、ここでは図化し得たものを報告する。

なお、出土遺物のうち、確実に近世段階の層から出土したものは、石黒大火（1720年）後の嵩上層から出土したものに限られる。土器・陶磁器では、16世紀後半代に比定できる備前焼擂鉢（第20図７）がある。嵩上げ層からは他にも細片であるが白磁端反皿（15世紀末～16世紀代）、焼き締め系の陶器片(時期、産地とも不詳）が２片出土している。　２片の陶器片のうち１片は内面には釉薬が残るが外面側は被熱によって失われているようだ。一方、瓦類では丸瓦（第21図６）がある。他の瓦よりも非常に厚手であり、今後の調査研究の指標となろう。これら以外の出土遺物は、各調査区において表土を含めた上層部で検出されたものが多く、近代以降の遺物も共伴するなど、撹乱が著しい状況を反映している。

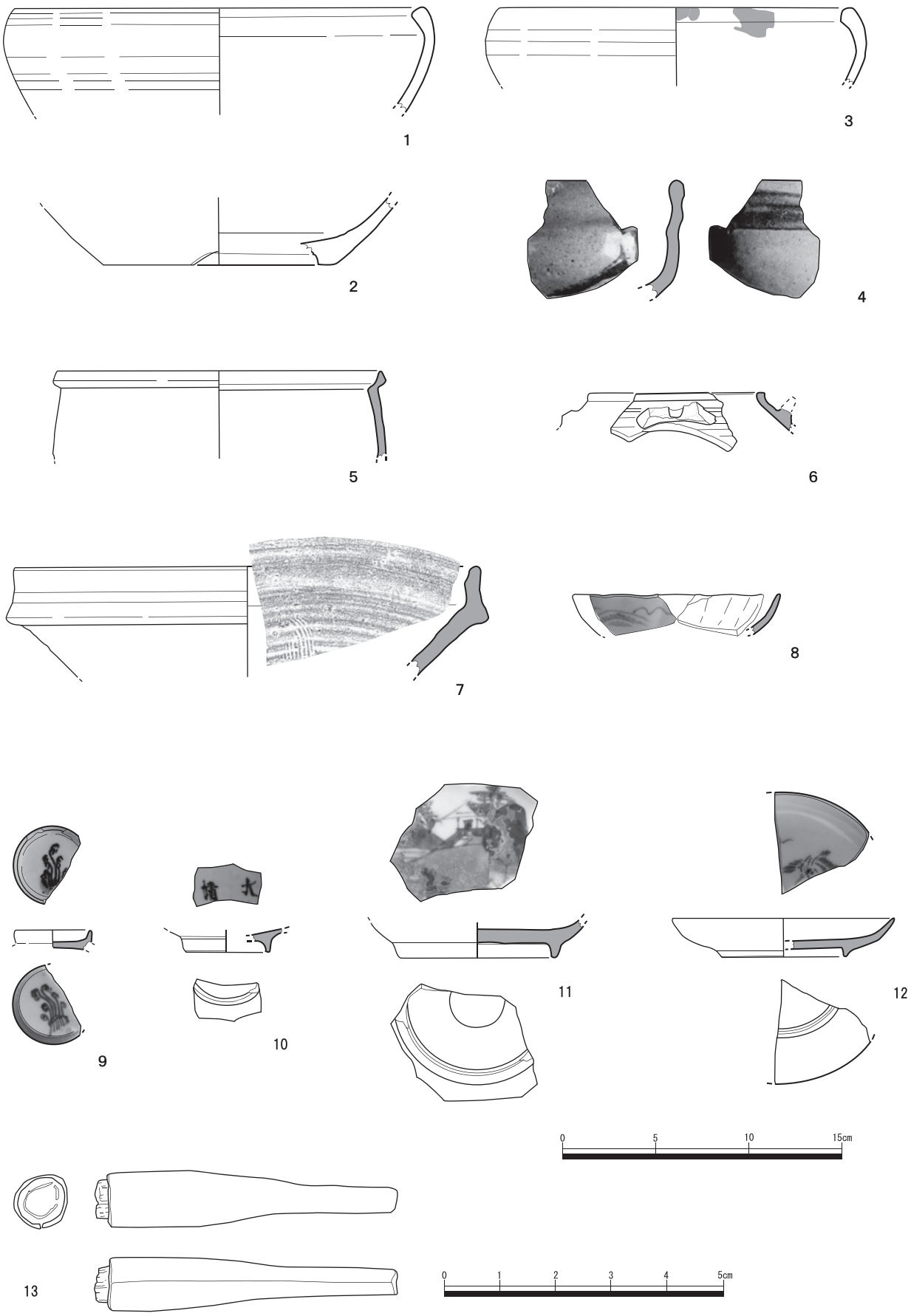
第１調査区の溝１埋土からは、桟瓦思われる瓦が多数出土しており、隣接する番小屋の瓦である可能性が高い。なお、今回、図化し報告した瓦の全ては、いぶし瓦であるが、細片の釉薬瓦も若干出土した。少なくとも釉薬瓦は確実に近世段階と比定できる層からは出土していないものの、どの段階で鳥取城において利用されるようになったのか別途考える必要があろう。

刻印瓦では、多様な刻印の存在が認められた。特に「文子」の刻印に関しては、江戸時代後期の鳥取藩士・岡島正義（1784～1859）が著書『藩邸考』の中で、「文化元子ノ年製ナル事ヲ表シタルモノト見エタリ」と記述しているが、「子」以外の「巳」「申」「戌」「亥」の存在は、彼の推定の傍証となると考えられる。

第１・第２調査区

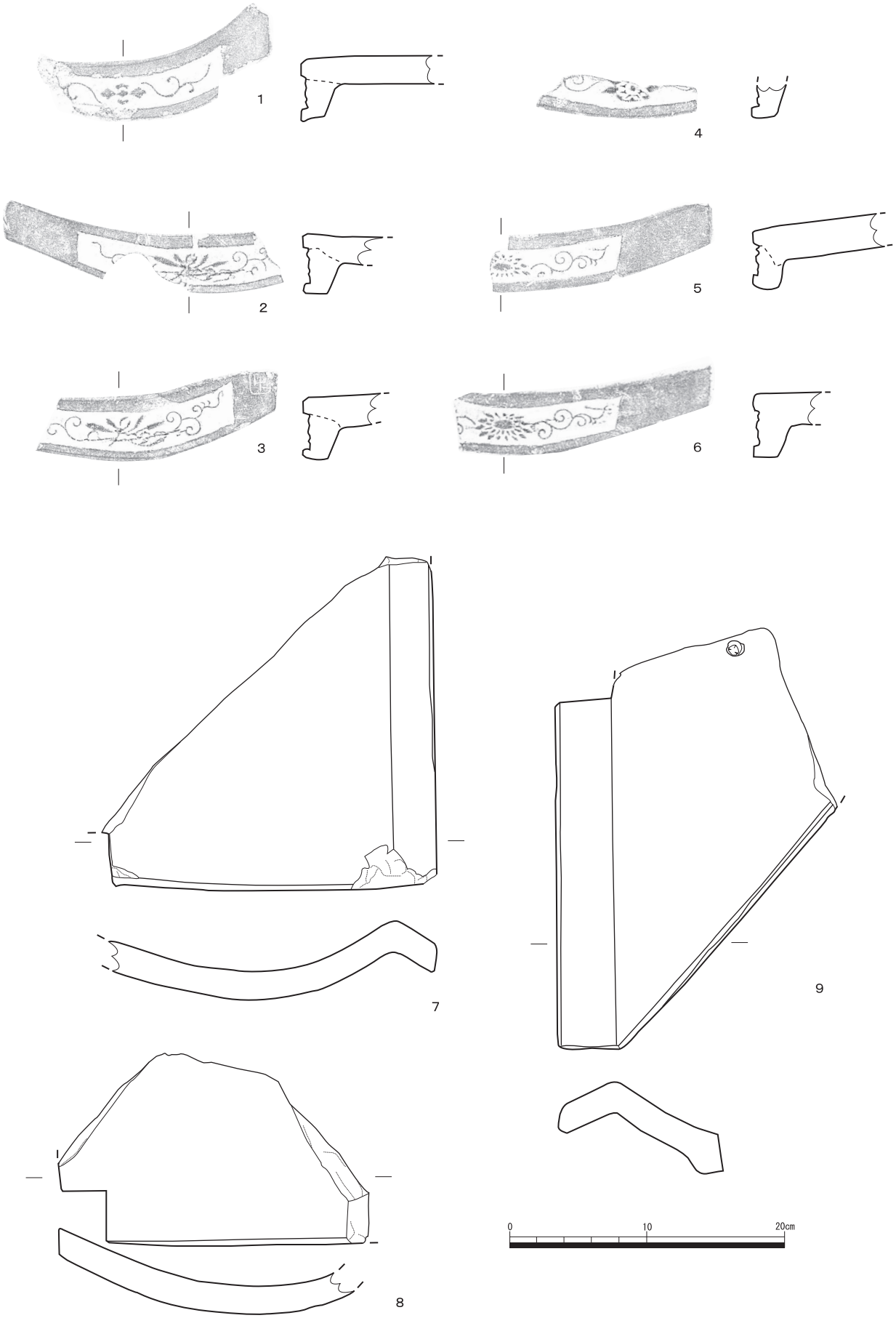
土器・陶磁器類（第20図）

１～３は、土師質土器の火鉢である。１、２は出土地点が近く、胎土も同質のため同一固体のもので、

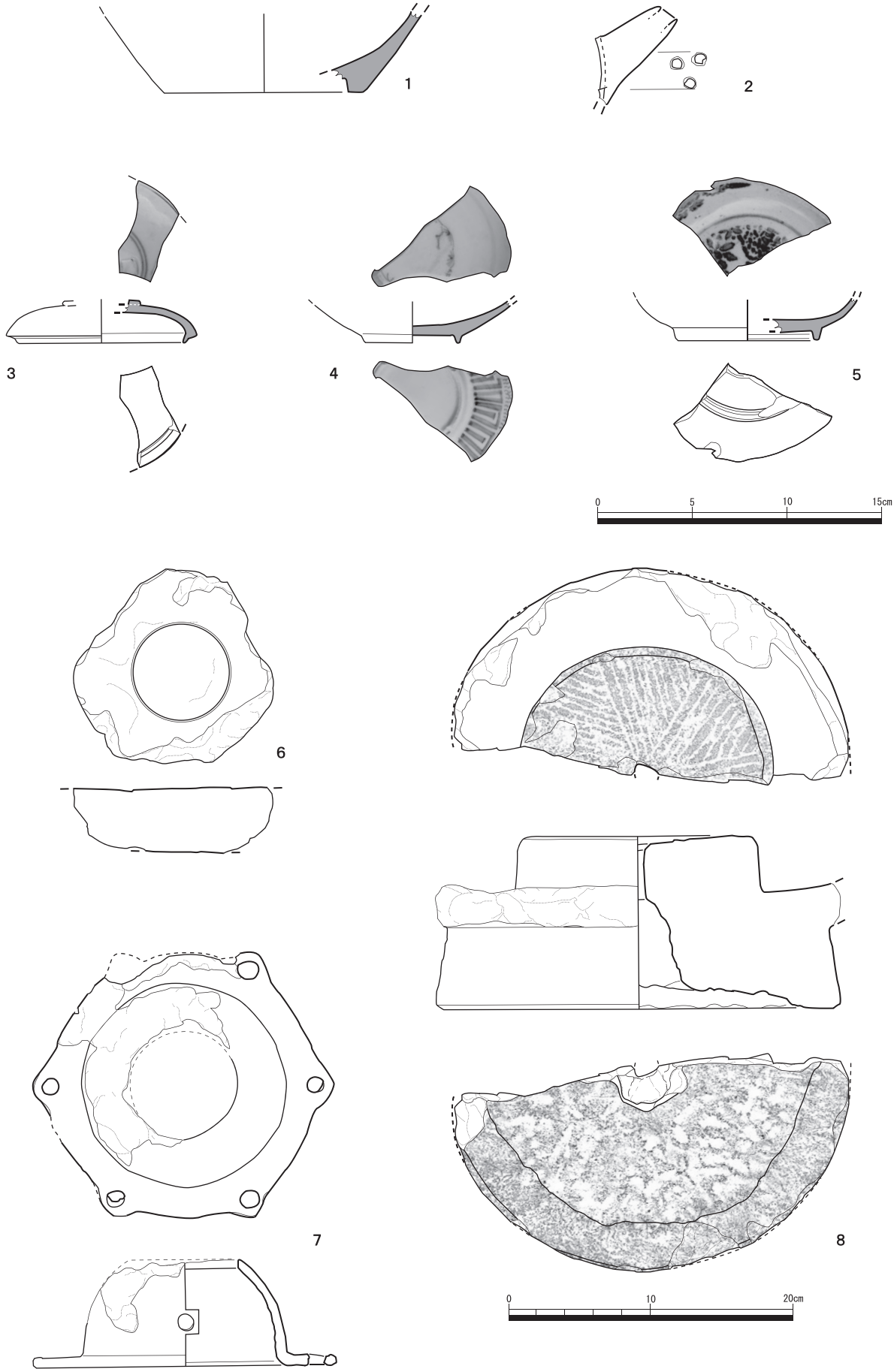


第20図　第1・2調査区出土遺物実測図1（1～12は1/3、13のみ1/1）

第21図　第1・2調査区出土遺物実測図2（S=1/4）



第22図　第1・2調査区出土遺物実測図3（S=1/4）



第23図　第3調査区出土遺物実測図1（1～7は1/3、8のみ1/4）

器高は9.0㎝程度と推定される。

４～７は陶器である。４は陶胎染付の碗であろう。体部に凹部があり、ねじれを持つ。内外面ともに鉄釉の装飾の後、透明釉を施す。５は、行平鍋である。蓋受け付近は露胎するが内外面とも塗土され、外面のみ透明釉を施す。外面体部上面には飛び鉋文が見られる。６は、土瓶もしくは急須であろう。吊り手の受け部は破損しているが、径0.7㎝程度の穿孔がある。７は備前焼の擂鉢である。口縁部は立ち上がりが大きく、端部内面のやや下がったあたりにはナデによって稜線が見られる。また口縁端部は重ね焼きによって面取りされたような様相を呈す。一方、口縁拡張部下角の付根には、重ね焼きされた別固体の口縁端部の熔着痕がある。また、同じ拡張部下半には２条の浅い凹線があり、一部に10条/2.0㎝の櫛目と１条の刻線が縦方向に残る。僅かであるが内面には10条/2.0㎝の摺目があり、放射状に施されたものと考えられる。これらの特長から16世紀後半のものと思われる。

８～12は磁器で、その内、８～11は染付磁器である。８は形打ち成形による菊花形状の皿である。内外面ともに、主に線画の文様を施す。９の碗蓋は、体部は欠損して摘み部のみが残る。見込み内に一箇所ハリの熔着痕がある。畳付は釉ハギで、高台内、見込み内双方にワラビ文を施す。10は小杯の底部である。見込みに足付ハマ熔着痕が二箇所残る。畳付は釉ハギが不十分であったようで、取り外し時の割れと思われる痕跡が顕著である。見込みには「大」「靖」の文字があり、「大明嘉靖年成」の一部と推定される。11は蛇の目凹形高台の皿底部で、見込には家屋や樹木等の風景が描かれている。12は近代以降の皿で畳付が釉ハギされる。高台内は透明釉、その他は青磁釉を施し、見込みには鶴の型紙摺り装飾文様が見られる。

13は真鍮製の煙管吸口である。18世紀後半以降のものと思われる。銹化が進行し表面には緑青が付着する。鍛造成形で接合部が明瞭に残る。小口には羅宇に利用された竹片が遺存する。

丸瓦類（第21図）

１～５は軒丸瓦である。左巻き三巴文（１～３）と揚羽蝶文（４・５）のものがある。左巻き三巴文のうち、無珠文のもの（１）と有珠文のもの（２・３）があり、３には小さな段が外縁内寄りを巡っている。２・３は焼成が特に悪い。４・５は、飛ぶ姿を表現した飛び蝶文ではなく、直立した羽で止まる姿を表現した止まり蝶文と考えられる。揚羽蝶文の中では、相対的に新しいものである。両者は同笵でない。５の外縁には□に文申の刻印がある。

６・７は遺存部分をもって一応のところ丸瓦として区分した。いずれも玉縁を有する。６は丸瓦厚2.6㎝とう厚手のものである。内面にはコビキBの痕跡が明瞭に残り、布目は若干見られる程度である。７もコビキBであるが、こちらは後の布目が明瞭に残る。また７の外面には○に十の刻印がある。

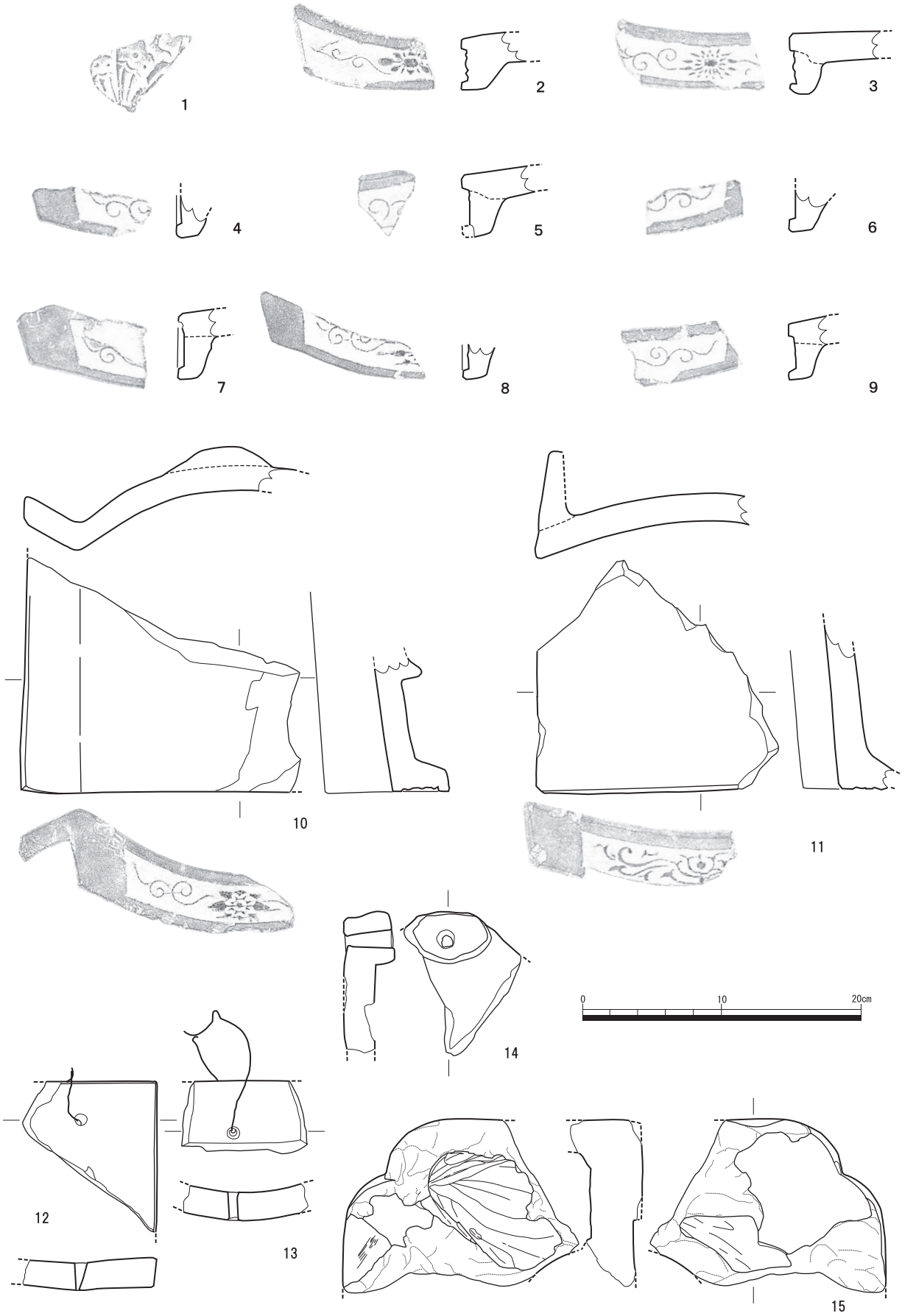
８は棟込瓦である。欠損で菊丸か輪違いかは不明である。内面には布目が明瞭に残る。

９～11は棟瓦である。９は、丸桟冠瓦と呼ばれるもので、外面に工具の当て具痕が残る。特徴的な胎土であり径２㎜以内の白色礫を多数含む。10・11は、山型の桟瓦タイプの棟瓦である。11の内面には粘土痕の歪が見られ平瓦状の粘土を内湾して成形した様子が見て取れる。また、桟端部には□に作の刻印が施されている。

平瓦類（第22図）

１～６は軒平瓦である。本瓦と桟瓦に区分できると思われるが、判然とせず今後の検討課題である。２・３と５・６はそれぞれ同笵である。中心飾りはいずれも花文を施す。１は花弁４枚、４は花弁８枚２重、５・６は花弁15枚２重であるが、２・３は写実的である。また、３の左周縁には□に申の刻印がある。

７～９は桟瓦である。７・８は平瓦と思われる。７の小口には□に文子、８には□に文巳の刻印が見られる。９は谷瓦で、穿たれた釘穴には内部に棒状の鉄製品を残す。



第24図　第3調査区出土遺物実測図2（S=1/4）

２　第３調査区

土器・陶磁器類（第23図）

１、２は陶器である。１は近代以降の上げ底の壺底部である。畳付けから高台内は露胎し、他の部分は施釉される。２は、急須もしくは土瓶と思われる。注口と胴部の付け根には３つの濾穴（径0.6㎝）があり、注口端部と付け根には絵柄を付ける。18～19世紀代のものと思われる。

３～５は磁器である。３は段重蓋で、見受部は釉ハギである。４は碗の底部である。畳付は釉ハギで、見込みに環状の松竹梅文を付ける。５は蛇の目凹形高台の皿で、高台内は蛇の目釉ハギである。見込みには一箇所、足付ハマの痕跡が明瞭に残る。見込み部は型紙摺り技法による文様を、一方、体部立ち上がり内面には手描きの文様を施す。

６は端部を欠損するが、円形の平面をもった厚みのある土製品で非常に軽く、土製の温石と思われる。中央に径5.2ｃｍの円形凸部があるが、その内側に刻印らしきものは認められない。全体が被熱し、特に球面側は黒色化している。７の鉄製品は、その形状からポール状の付け根部を留める金具のようなものであろうか。８は安山岩製の茶臼の下臼である。受け皿の立ち上がり部は欠損しているが、臼面は切線主溝型で軸穴形は方形である。

瓦類（第24図）

１は軒丸瓦の文様区の破片だが、止まりの揚羽蝶文が施されている。

２～10は軒平瓦である。４～６は唐草のみの破片であり、中心飾りは不明である。他はいずれも中心飾りが花文である。２は花弁12枚、３は花弁15枚２重で、７～10は同笵で花弁８枚２重のものである。10は引っ掛け部分のある桟瓦で、７～９も同じ形態であったと推察される。７・10には左周縁に□に作の刻印が押されている。

11は袖角瓦である。中心飾りは、花弁などを形骸化した文様であり、他の瓦当とは異なって文様区の凹凸が非常に浅く、稚拙な作りの印象を受ける。12・13は平瓦と思われる。端部側に吊り穴があり、径１㎜程度の銅線が残っている。14・15は役瓦である。14は、凸部を貼り付け肥厚し吊り穴を穿つ。15は鬼瓦の一部と考えられる。

刻印瓦（第25図）

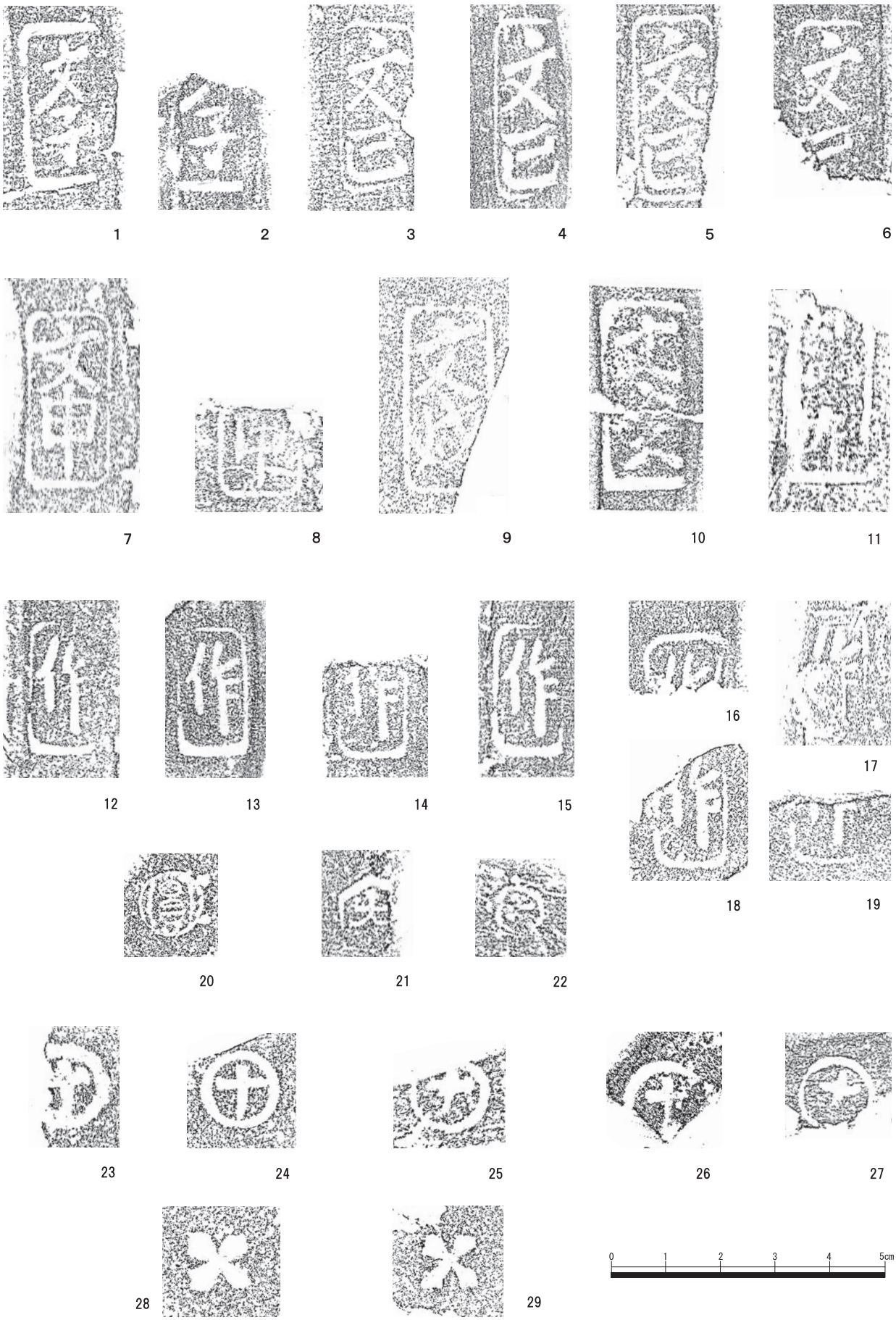
刻印が施された瓦は第１調査区において19点、第３調査区において10点出土した。詳細は観察表に記したが、概して第１調査区では溝１の埋土層、第３調査区ではTr１の３層から多く出土した。刻印は大別すると文字型（１～27）と図形型（28～29）に区分でき、文字型はさらに細分できる。

１～10は隅丸長方形の外郭線に「文」と「干支と思われる一字」を記したものである。文字に応じて外郭線の長さは差異があるが、概ね縦3.1～3.5㎝、横1.5㎝内外を示す。いずれも燻し瓦の軒丸瓦、丸瓦、軒平瓦、平瓦に見られる。位置は、軒丸で外周の中心付近、丸瓦で頂辺中央部、軒平瓦で周縁部、平瓦で小口中央部と考えられ、比較的目立つ箇所である。平瓦は桟を伴うものが多く、外観などから細片のものも桟瓦である可能性が高い。

11は、釉薬瓦（赤瓦）に施された刻印である。「湖九」と判読できようか。縦3.0㎝以上、横1.6㎝の外郭線を伴う。位置も他が平瓦部で小口に見られるのとは異なり、上面の小口寄りにある。

12～19は隅丸長方形の外郭線に「作」の刻印である。外郭線はおおよそ縦2.4㎝、横1.3㎝である。軒平瓦では周縁部、平瓦では小口、棟瓦では桟部分の小口に位置する。

20は円に「實」をやや図案化したもので、他の全てが陰刻であるのに対し唯一の陽刻である。円の径は1.2㎝で平瓦部の小口に位置する。



第25図　出土刻印瓦拓影（S=1/1）

図	No.	区	出土層等	種別	器種	法量/cm	形態・技法等の特徴	胎土・焼成	色調など
20	1	1区	2層	土師質土器	火鉢	口径(22.0)	ロクロナデ	(胎土)密 石英、褐色粒若干含 (焼成)良好	(内外)7.5YR7/6橙
20	2	1区	2層	土師質土器	火鉢	底径(12.4)	体部内外面ロクロナデ/高台内ヘラ削り 高台に抉部あり	(胎土)密 石英、褐色粒若干含 (焼成)良好	(内外)7.5YR7/6橙
20	3	1区	溝1埋土	土師質土器	火鉢	口径(19.0)	ロクロナデ/口縁端部内面に煤付着	(胎土)密 石英、褐色粒多く含 (焼成)良好	(内外)7.5YR8/4浅黄橙
20	4	2区	表土	陶胎染付	碗？	—	体部にねじれあり 内外面ともに鉄釉の装飾のち透明釉あり	(胎土)黒色粒若干含 (焼成)良好	(釉)透明釉、 鉄釉 N黒～2.5GY暗オリーブ灰3/1 (胎土)75Y灰6/1
20	5	2区	Tr6 現代撹乱	陶器	行平鍋	口径(17.4)	蓋受け付近露胎し、それ以外には塗土/外面施釉 外面体部上面に飛び鉋文	(胎土)密 (焼成)良好	(釉)透明釉5Y6/3オリーブ黄 (塗土)5YR3/6暗赤褐 (外面)7.5YR4/4褐 (露胎部)2.5Y6/2灰黄 (胎土)5Y灰白7/1
20	6	1区	溝1埋土	陶器	土瓶？	口径(9.2)	ロクロナデ/蓋受け付近露胎、外面施釉 内面口縁部のみ施釉	(胎土)密 (焼成)良好	(釉)5Y3/2オリーブ黒 (胎土)2.5Y7/4浅黄
20	7	1区	34層 (嵩上層)	備前焼	擂鉢	口径(24.8)	口縁端部及び下部に重焼きの痕跡 内面に摺目(放射状10条/2.0㎝) 口縁拡張部外面に 櫛目(10条/2.0㎝)と刻線、2条の浅い凹線	(胎土)密・ 石英、褐色粒若干含 (焼成)良好	(内外)2.5YR3/2暗赤褐 ～2.5YR5/3にぶい赤褐 (胎土)2.5YR3/3暗赤褐
20	8	1区	溝1埋土	染付磁器	皿	口径(11.0)	菊花形皿(型打ち成形)	(胎土)陶石・密 (焼成)良好	(釉)透明釉 (胎土)灰白
20	9	1区	土抗2 埋土下層	染付磁器	碗蓋	口径(4.0)	見込みにハリ熔着痕/畳付釉ハギ 高台内・見込みに蕨文	(胎土)陶石・密 (焼成)良好	(釉)透明釉 (胎土)灰白
20	10	1区	溝1埋土	染付磁器	小杯	底形(4.4)	見込みに足付ハマ熔着痕/畳付釉剥ぎ不十分 見込み「大」「靖」の銘あり、大明嘉靖年成？	(胎土)陶石・密 (焼成)良好	(釉)透明釉 (胎土)灰白
20	12	1区	土抗2 埋土下層	染付磁器	皿	口径(8.2)	蛇の目凹形高台/見込みに家屋、樹木等の文様	(胎土)陶石・密 (焼成)良好	(釉)透明釉 (胎土)灰白
20	11	1区	土抗2 埋土下層	磁器	皿	口径(12.0)	畳付釉ハギ/見込みに鶴の文様(型紙摺り装飾) 高台内面透明釉、その他青磁釉	(胎土)陶石・密 (焼成)良好	(釉)透明釉 青磁釉7.5GY明緑灰 (胎土)灰白
20	13	1区	表土	金属製品	煙管吸口	小口径0.95 口付径0.45 長さ 5.1	真鍮製/銹化によって表面に緑青付着 鍛造成形の接合部有り 小口内に羅宇の竹片が残る	—	—

図	No.	区	出土層等	種別	器種	同笵	法量/cm	形態・技法等の特徴	胎土・焼成	色調など
21	1	1区	Tr1 6～18層	燻し瓦	軒丸瓦	—	文様区厚1.3 瓦当厚2.5	左巻き三巴(無珠文)	(胎土)密 (焼成)やや不良	(内外)7.5Y6/1灰 (断面)7.5Y6/1灰
21	2	1区	Tr1 表土	燻し瓦	軒丸瓦	—	文様区厚2.4	左巻き三巴	(胎土)密 (焼成)不良	(内外)7.5Y8/1灰白 (断面)7.5Y6/1灰
21	3	1区	Tr1 6～18層	燻し瓦	軒丸瓦	—	文様区厚2.3 瓦当厚2.6	左巻き三巴/外縁内側寄りに小段がある。	(胎土)密 (焼成)不良	(内外)7.5Y8/1灰白 (断面)7.5Y6/1灰
21	4	1区	Tr1 表土	燻し瓦	軒丸瓦	—	文様区厚1.8	揚羽蝶文(止まり)	(胎土)密 (焼成)やや不良	(外面)5y6/1灰 (内断面)5Y7/1灰白
21	5	1区	Tr1 6～18層	燻し瓦	軒丸瓦	—	文様区厚2.0 瓦当厚2.8	揚羽蝶文(止まり)/□に文中の刻印 外面光沢あり	(胎土)密 (焼成)良好	(外面)5Y6/1灰 (内断面)5Y7/1灰白
21	6	2区	Tr6 8～10層 (嵩上層)	燻し瓦	丸瓦	—	丸瓦厚2.6	コビキBのち布目	(胎土)密 1㎜以内の砂粒含 (焼成)やや不良	(内外)7.5Y4/1灰 (断面)7.5Y7/1灰白
21	7	1区	土抗2 埋土下層	燻し瓦	丸瓦	—	玉縁長2.7 丸瓦厚1.8	コビキBのち布目/外面に○に十の刻印あり	(胎土)密 石英若干含 (焼成)良好	(内外)10Y4/1灰 (断面)10Y7/2灰白
21	8	2区	表土	燻し瓦	棟込瓦	—	丸瓦厚1.15	布目/外面光沢あり	(胎土)密 (焼成)良好	(内外)N5/0灰 (断面)10Y7/1灰白
21	9	2区	溝2 埋土層	燻し瓦	棟瓦	—	丸瓦厚1.7	丸桟冠瓦/型のあてぐ痕あり 内外面とも光沢あり	(胎土)密 2㎜以内の白色礫 多含(焼成)良好	(内外)N2/0暗灰 (断面)5Y7/4浅黄
21	10	1区	溝1 埋土層	燻し瓦	棟瓦	—	丸瓦厚1.9	角桟冠瓦/外面光沢あり	(胎土)密 (焼成)良好	(内外)N4/0灰 (断面)10Y6/1灰
21	11	1区	溝1 埋土層	燻し瓦	棟瓦	—	丸瓦厚2.4	角桟冠瓦/外面光沢あり 桟部分の頭に□に作の刻印あり 内面頂部に内湾させた痕跡あり	(胎土)密 (焼成)良好	(内外)N4/0灰 (断面)10Y6/1灰

図	No.	区	出土層等	種別	器種	同笵	法量/cm	形態・技法等の特徴	胎土・焼成	色調など
22	1	1区	溝1 埋土層	燻し瓦	軒平瓦	—	文様区高2.15 瓦当高4.0 平瓦厚2.1	花文(花弁4枚) 外面光沢あり	(胎土)密 (焼成)良好	(内外)N6/0灰 (断面) 2.5GY7/1明オリーブ灰
22	2	1区	溝1 埋土層	燻し瓦	軒平瓦	同笵	文様区高2.5 瓦当高4.0 平瓦厚2.1	花文 外面光沢あり	(胎土)密 (焼成)良好	(内外)N4/0灰 (断面) 2.5GY7/1明オリーブ灰
22	3	1区	溝1 埋土層	燻し瓦	軒平瓦		文様区高2.5 瓦当高3.9 平瓦厚2.2	花文/外面光沢あり □に文中の内、中の刻印あり	(胎土)密 (焼成)やや不良	(内外)N7/0灰白 (断面) 2.5GY7/1明オリーブ灰

表１　出土遺物観察表

図	No.	区	出土層等	種別	器種	同笵	法量/cm	形態・技法等の特徴	胎土・焼成	色調など
22	4	1区	溝1 埋土層	燻し瓦	軒平瓦	—	文様区高1.6+ 瓦当高2.3+	花文(花弁8枚2重)	(胎土)密 (焼成)良好	(内外)N6/0灰 (断面) 2.5GY7/1明オリーブ灰
22	5	1区	溝1 埋土層	燻し瓦	軒平瓦	同笵	文様区高2.1 瓦当高(3.7) 平瓦厚2.5	花文(花弁15枚2重)/外面光沢あり	(胎土)密 (焼成)良好	(外面)N3/0暗灰 (内)N5/0灰 (断面)N7/0灰白
22	6	1区	Tr1 6～18層	燻し瓦	軒平瓦		文様区高2.5 瓦当高4.5 平瓦厚2.3	花文(花弁15枚2重)/外面光沢あり/釘穴あり	(胎土)密 (焼成)良好	(内外)N3/0暗灰 (断面)7.5Y7/2灰白
22	7	1区	溝1 埋土層	燻し瓦	平瓦 桟瓦	—	平瓦厚2.0	小口に□に文子の刻印あり/外面光沢あり	(胎土)密 (焼成)良好	(内外)N5/0灰 (断面)N7/0灰白
22	8	1区	溝1 埋土層	燻し瓦	平瓦 桟瓦	—	平瓦厚2.1	小口に□に文巳の刻印あり/外面光沢あり	(胎土)密 (焼成)良好	(内外)N4/0灰 (断面)10Y5/1灰
22	9	1区	溝1 埋土層	燻し瓦	谷瓦 桟瓦	—	平瓦厚2.0	外面光沢あり/釘穴に金属片遺存	(胎土)密 (焼成)良好	(内外)10Y5/1灰 (断面)10Y7/1灰白

図	No.	区	出土層等	種別	器種	法量/cm	形態・技法等の特徴	胎土・焼成	色調など
23	1	3区	Tr5 2層	陶器	壺	底径(10.4)	上げ底/畳付け～高台内露胎、他施釉	(胎土)密 (焼成)良好	(釉)7.5YR3/3暗褐 (露胎)5YR5/6明赤褐 (胎土)5Y8/1灰白
23	2	3区	Tr1 4～6層	陶器	急須？	注口幅1.0	径0.6cmの濾穴3個あり/注口端と付け根に絵柄	(胎土)密 (焼成)良好	(釉)透明釉 (外面)7.5Y8/1灰白 (内断面)5Y8/2灰白
23	3	3区	Tr3 溝埋土	染付 磁器	段重蓋	口径(8.8)	身受部釉ハギ、他施釉	(胎土)密 (焼成)良好	(釉)透明釉 (胎土)灰白
23	4	3区	Tr5 9•10層	肥前系 染付 磁器	碗	底径(5.2)	畳付釉ハギ、他施釉/見込み環状松竹梅文有り	(胎土)密 (焼成)良好	(釉)透明釉 (胎土)灰白
23	5	3区	Tr2 1•2層	染付 磁器	皿	底径(7.3)	蛇の目凹形高台/蛇の目釉剥ぎ 見込みにハマの跡あり/型紙摺り技法	(胎土)密 (焼成)良好	(釉)透明釉 (胎土)灰
23	6	3区	Tr5 2層	土師質	土製 温石?	最大径11.0 厚3.4	中央径5.2cmの円形凸面有り/全体が被熱	(胎土)疎 (焼成)良好	(円形凸面側)10YR8/1灰白 (〃反対側)7.5Y2/1黒
23	7	3区	Tr4内	鉄製品	不明	最大径16.1 高さ5.7	留穴6個/アーチ部に左右対称の穴２つあり	—	(内外面)錆色
23	8	3区	Tr6 3層	石製品	茶臼 下臼	臼面径(16.2) 台部高5.7 軸穴径１．８	安山岩製/臼面切線主溝型/軸穴形は方形	—	5BG青灰5/1

図	No.	区	出土層等	種別	器種	同笵	法量/cm	形態・技法等の特徴	胎土・焼成	色調など
24	1	3区	Tr1 2層	燻し瓦	軒丸瓦	—	文様区厚1.5	揚羽蝶文(止まり)	(胎土)密 (焼成)やや不良	(内外段面)7.5Y7/1灰白
24	2	3区	Tr1 2層	燻し瓦	軒平瓦	—	文様区高2.2 瓦当高3.5 平瓦厚2.2	花文(花弁12枚)/外面光沢あり	(胎土)密 (焼成)良好	(内外)N4/0灰 (断面)10Y7/2灰白
24	3	3区	Tr1 3層	燻し瓦	軒平瓦	—	文様区厚2.4 瓦当厚3.7 平瓦厚2.0	花文(花弁15枚2重)/外面光沢あり	(胎土)密 (焼成)良好	(内外)N4/0灰 (断面) 2.5GY7/1明オリーブ灰
24	4	3区	Tr1 3層	燻し瓦	軒平瓦	—	—	外面光沢あり	(胎土)密 (焼成)良好	(内外)N4/0灰 (断面) 2.5GY7/1明オリーブ灰
24	5	3区	Tr1 3層	燻し瓦	軒平瓦	—	平瓦厚2.0	外面光沢あり	(胎土)密 (焼成)良好	(内外)N4/0灰 (断面)N6/0灰
24	6	3区	Tr1 3層	燻し瓦	軒平瓦	—	—	外面光沢あり	(胎土)密 (焼成)良好	(内外)N4/0灰 (断面) 2.5GY7/1明オリーブ灰
24	7	3区	Tr1 3層	燻し瓦	軒平瓦 桟瓦？	同笵	—	花文(花弁8枚2重)/外面光沢あり □に作の刻印	(胎土)密 (焼成)良好	(内外)N4/0灰 (断面) 2.5GY7/1明オリーブ灰
24	8	3区	Tr1 3層	燻し瓦	軒平瓦 桟瓦？		—	花文(花弁8枚2重)/外面光沢あり	(胎土)密 (焼成)良好	(内外)N4/0灰 (断面) 2.5GY7/1明オリーブ灰
24	9	3区	Tr1 3層	燻し瓦	軒平瓦 桟瓦？		—	花文(花弁8枚2重)/外面光沢あり	(胎土)密 (焼成)良好	(内外)N4/0灰 (断面) 2.5GY7/1明オリーブ灰
24	10	3区	Tr1 3層	燻し瓦	軒平瓦 桟瓦		文様区高2.5 瓦当高4.0 平瓦厚2.0	花文(花弁8枚2重)/外面光沢あり/□に作の刻印	(胎土)密 (焼成)良好	(内外)N4/0灰 (断面) 2.5GY7/1明オリーブ灰
24	11	3区	Tr1 3層	燻し瓦	袖角瓦	—	平瓦厚2.0	花文か？	(胎土)密 (焼成)良好	(内外)N5/0灰 (断面) 2.5GY7/1明オリーブ灰
24	12	3区	Tr3 溝埋土	燻し瓦	平瓦	—	平瓦厚2.0	吊り穴あり/径1㎜の銅線遺存	(胎土)密 (焼成)良好	(内外)N3/0灰 (断面)10Y6/1灰
24	13	3区	Tr1 3層	燻し瓦	平瓦	—	平瓦厚2.1	吊り穴あり/径1㎜の銅線遺存	(胎土)密 (焼成)良好	(内外)N3/0暗灰 (断面)7.5Y7/2灰白
24	14	3区	Tr1 3層	燻し瓦	役瓦	—	—	吊り穴あり	(胎土)密 (焼成)良好	(内外)N4/0灰 (断面)10Y7/2灰白
24	15	3区	Tr4内	燻し瓦	鬼瓦	—			(胎土)密 (焼成)良好	(内外)N4/0灰 (断面)7.5Y4/1灰

表２　出土遺物観察表

図	NO.	区	出土層等	種別	刻印			瓦					備考
					外郭	内郭	陽刻・陰刻	種別	器種	厚さ		刻印位置	
										測定部位	(cm)		
25	1	1	溝1 埋土層	文字	隅丸長方形	文子	陰	燻し瓦	平瓦 桟瓦	平瓦部	2.0～2.1	小口中央	第22図 7
25	2	1	溝1 埋土層	文字	隅丸長方形	文子	陰	燻し瓦	軒平瓦 桟瓦か	平瓦部	1.7～2.0	小口	
25	3	1	溝1 埋土層	文字	隅丸長方形	文巳	陰	燻し瓦	平瓦 桟瓦	平瓦部	1.8～2.0	小口中央	第22図 8
25	4	1	溝1 埋土層	文字	隅丸長方形	文巳	陰	燻し瓦	軒平瓦 桟瓦か	平瓦部	2.1	小口	
25	5	1	溝1 埋土層	文字	隅丸長方形	文巳	陰	燻し瓦	平瓦 桟瓦	平瓦部	1.9～2.0	小口中央	
25	6	1	溝1 埋土層	文字	隅丸長方形	文巳	陰	燻し瓦	平瓦 桟瓦	平瓦部	2.0～2.1	小口中央	
25	7	3	Tr1 6～18層	文字	隅丸長方形	文申	陰	燻し瓦	軒丸瓦	丸瓦部	2.1	外周中央付近	第21図 5
25	8	1	溝1 埋土層	文字	隅丸長方形	文申	陰	燻し瓦	軒平瓦 桟瓦か	平瓦部	2.2	右周縁	第22図 3
25	9	1	溝1 埋土層	文字	隅丸長方形	文戌	陰	燻し瓦	丸瓦	丸瓦部	1.8～2.0	頂辺真中付近	
25	10	1	溝1 埋土層	文字	隅丸長方形	文亥	陰	燻し瓦	平瓦 桟瓦	平瓦部	2.0～2.1	小口中央	
25	11	3	Tr1 2層	文字	隅丸長方形	湖九？	陰	釉薬瓦 (赤瓦)	平瓦か	平瓦部	1.7	上面小口寄り	
25	12	1	溝1 埋土層	文字	隅丸長方形	作	陰	燻し瓦	平瓦 桟瓦か	平瓦部	1.8～2.0	小口	
25	13	1	溝1 埋土層	文字	隅丸長方形	作	陰	燻し瓦	棟瓦 桟瓦	桟部分	1.9～2.0	桟の小口中央	第21図 11
25	14	1	溝1 埋土層	文字	隅丸長方形	作	陰	燻し瓦	平瓦 桟瓦か	平瓦部	1.9～2.1	小口	
25	15	3	Tr1 3層	文字	隅丸長方形	作	陰	燻し瓦	平瓦 桟瓦か	平瓦部	2.0	小口中央	
25	16	3	Tr1 3層	文字	隅丸長方形	作	陰	燻し瓦	平瓦 桟瓦	平瓦部	2.1	小口中央	
25	17	3	Tr1 3層	文字	隅丸長方形	作	陰	燻し瓦	軒平 桟瓦	平瓦部	1.8	左周縁	第24図 10
25	18	3	Tr1 3層	文字	隅丸長方形	作	陰	燻し瓦	軒平 桟瓦	平瓦部	1.8	右周縁	
25	19	3	Tr1 3層	文字	隅丸長方形	作	陰	燻し瓦	軒平 桟瓦	平瓦部	1.9	左周縁	第24図 7
25	20	1	土坑1	文字	円形	實	陽	燻し瓦	平瓦	平瓦部	2.0～2.3	小口	
25	21	3	Tr1 2層	文字	六角形	大	陰	燻し瓦	平瓦	平瓦部	2.0	小口	
25	22	3	Tr3 5～6層	文字	六角形	大	陰	燻し瓦	平瓦	平瓦部	1.9～2.0	小口	
25	23	1	土坑1	文字	円形	十	陰	燻し瓦	丸瓦	丸瓦部	1.8～2.0	頂辺付近	
25	24	1	溝1 埋土層	文字	円形	十	陰	燻し瓦	丸瓦	丸瓦部	1.8	頂辺玉縁寄り	第21図 7
25	25	1	表土	文字	円形	十	陰	燻し瓦	平瓦	平瓦部	1.8～2.0	小口	
25	26	1	土坑1	文字	円形	十	陰	燻し瓦	平瓦	平瓦部	1.7～2.0	小口	
25	27	3	Tr1 3層	文字	円形	十	陰	燻し瓦	平瓦	平瓦部	1.8	小口	
25	28	1	土坑1	図形	―	菱形の 連結	陰	燻し瓦	丸瓦	丸瓦部	2.5	不明	
25	29	1	表土	図形	―	菱形の 連結	陰	燻し瓦	丸瓦	丸瓦部	2.5	頂辺付近	

表 3　刻印瓦観察表

註. 表1・2の法量のうち（　）内に示した数値は推定復元値、また瓦は遺存部のみの数値
註. 表1・2の色調は染付磁器以外において 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』を用いた。
註. 瓦の器種名は、坪井利弘1986『図鑑瓦屋根（改訂版）』理工学社を参照した。
註. 表3の瓦の器種名は、現時点で判別できる範囲で記入した。

21・22は六角形に「大」と記したものである。双方、平瓦部の小口にある。21のほうが22より明瞭で、「大」の字も力強く記されている。

23～27は暫定的に円に「十」の字としたが、23・24のように円いっぱいに力強く「十」が書かれたものと、25～27のように「ナ」に近いものがあるようだ。円の径は1.5㎝程度である。丸瓦では頂辺付近、平瓦では小口に見られる。

28・29は菱形４つを連結したものである。25は細片で刻印位置が不明だが、28同様、頂辺付近のものであろうか。いずれも、丸瓦の中でも厚さ2.5㎝と厚いものに刻印されている。

第Ⅳ章　まとめ

まとめ

太鼓御門は城の中枢である三ノ丸へと通じる入口部にあたる重要な門であり、その名のとおり時を告げる太鼓を打つ役目を担っていた場所と伝えられる。鳥取城を描いた絵図は様々存在し、増改築を繰り返しながらその時々を様子を伝えているが、17世紀代とされる初期の頃より、同地には石垣を跨ぐ渡櫓がみられる。

近代以前の鳥取城

調査結果のとおり遺構面は大きく２面存在することがわかった。現地表面のアスファルトとコンクリート層直下に存在する上層礎石周辺と、ここから７～80㎝ほど下層に位置する下層礎石にともなう面の２つである。ここでは上下の遺構面をそれぞれ上層遺構面と下層遺構面としてその詳細について述べる。

上層遺構面（石黒大火以後）

鳥取城最後の造成工事である万延元（1860）年の大拡張では、三ノ丸部分が南東側へ広げられた。太鼓御門周辺での変化では門東側に位置していた御宝蔵が取り払われ、屋敷地へ変更されており、それにともない、それまで太鼓御門を潜り城内へ入ると右手方向に続いていた登城路が、左手方向へ付け替えられている点である。また、それより若干さかのぼり嘉永３（1850）年にはTr-１周辺の現切石積み付近の石垣が地震により被害を受けており修復願が提出されているため、切石積み石垣はこの修復時に積まれたものと考えられる。

しかしながらいずれの場合でも、太鼓御門櫓そのものを変更するものではなく、大きな改変がみられるのは享保５（1720）年、城内の大半を失ったとされる石黒大火後である。火事の翌年提出された修復願図では「処所石垣左右共高サ弐間横四間崩申候」とあり、櫓台部分の石垣を含む周辺石垣が崩れていることがわかり、この時期を境にして大きな改築があったことが想定される。

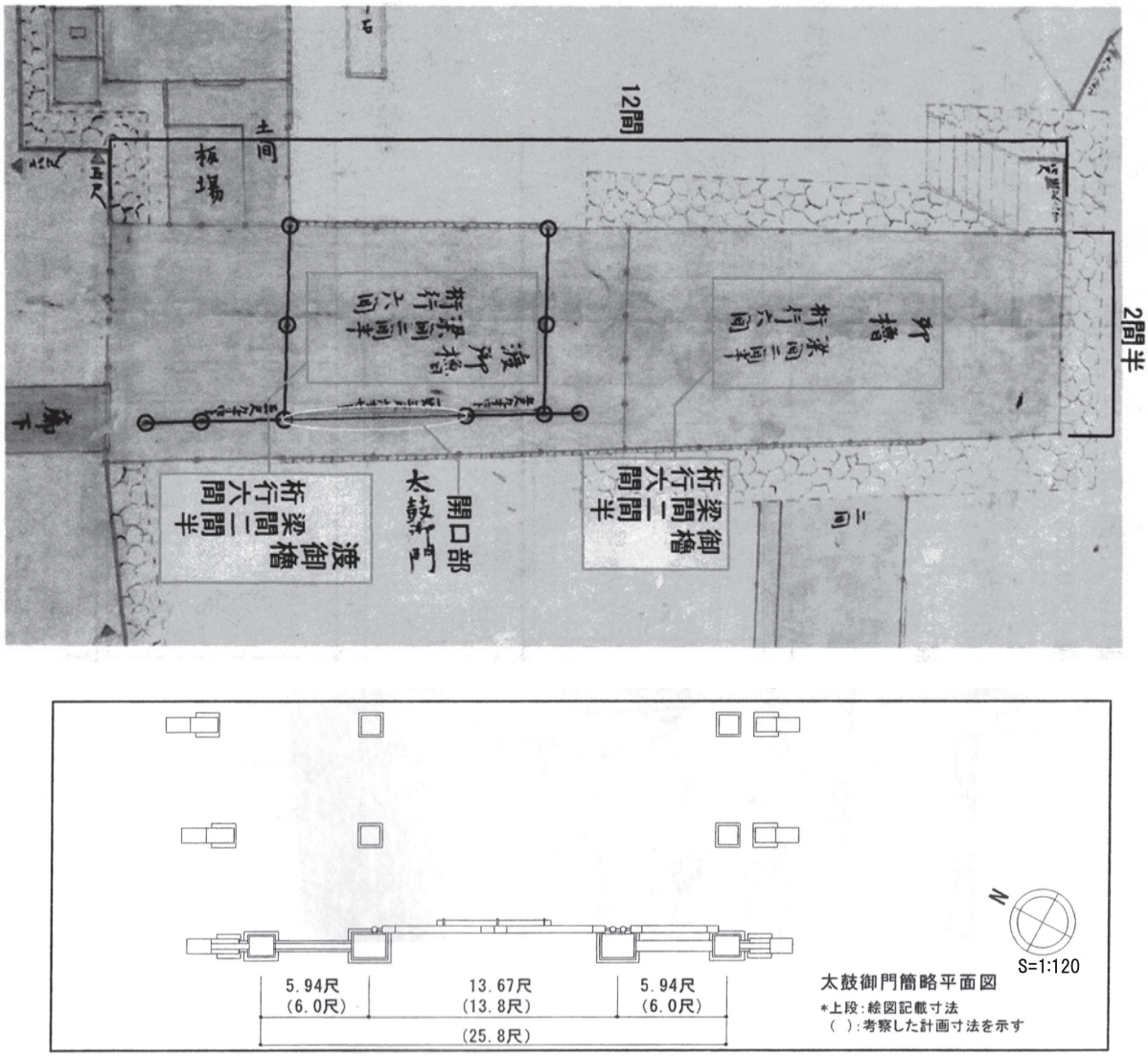
太鼓御門櫓自体の規模を記している史料も数点残っているが、いずれも19世紀代半ば以降のものである。また、明治初（1868）年に撮影された写真（写真４）もあるが規模を正確に測るまでには至らない。６点の史料のうち３点は城の全体図であり、もう３点は建物の配置を記しており中でも情報量が多いのが万延元年以降に描かれたとされる第27図「鳥取城三ノ丸絵図」（部分）である。各絵図共通しているのは櫓の寸法が12間×２間半という点である。第27図によると石垣上の御櫓部分が“梁間二間半、桁行六間”であり、門があった渡御櫓部分が同じく二間半と六間である。この絵図には１階部分と２階部分の柱位置関係が示されており、１階部分については鏡柱の後ろに２本の控柱を備える形態であることがわかる。また、鏡柱間は一丈三尺六寸七歩、脇は五尺九寸四歩とあり、門を抜けた左手石垣沿いには幕番所と上番所が描かれている。

上層礎石上面の標高は３石とも12.4mとほぼ同じであり、櫓台石垣の天端は標高15.9m付近にあり、

第26図　鳥取城修復願絵図〈万延元年（1860）10月〉（鳥取県立博物館所蔵）
＊「鳥取県立博物館所蔵　鳥取城絵図集」鳥取県立博物館1998より転載

写真４　鳥取城古写真

明治初年撮影
橋　　擬宝珠橋
手前　中ノ御門
奥　　太鼓御門



第27図　鳥取城三ノ丸絵図（部分）および礎石位置復元図
＊絵図は鳥取県立博物館所蔵に加筆

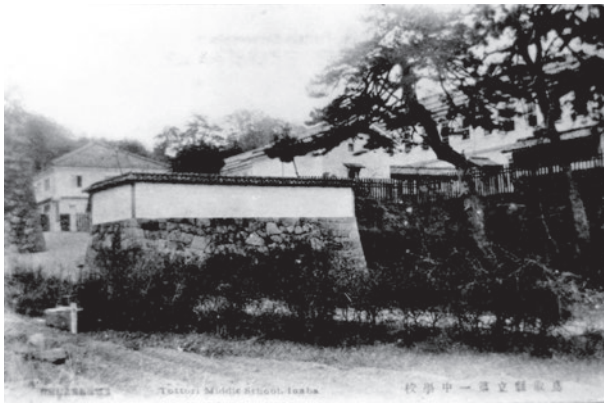


写真５　太鼓御門周辺（明治期）

写真６　地震により崩壊した太鼓御門石垣

その差は3.5mほどである。礎石はいずれも原位置を動いている可能性がある。一方、石垣は昭和18年の地震後積みなおされているが残存部と同じ高さに積まれているため旧来の標高との差異はないとみてよい。天保年間（1830～1844）頃に描かれた「鳥取御城内手配之図」の記載によれば門高は“一丈二尺（　3.6m）”、石垣高は“一丈一尺（　3.3m）”とあり、20㎝程度の差はみられるものの現況に近い高さであったことが伺える。

柱の位置を今回の発掘調査での検出遺構を比較するとおおよそ近い位置に比定することができる。上層礎石については門に向かい一番左手の一石が欠けるものの、１と２が鏡柱、３が脇柱であり、礎石根固め１・２はそれぞれ控柱の場所と想定される。しかし、おおよその位置にはあるものの細かい点で絵図と遺構には若干の相違があり、一致しない。上層礎石１・２の鏡柱間も絵図の記載よりは若干広く、上層礎石３についても、後ろの礎石根固めの延長線上にはない。A-B土層断面でみられた12～15層をやはり近代以降の礎石再設置にともなう層とするならば、上層礎石１は原位置を保っていないと言える。しかし、上層礎石３を２つの根固めの延長線上に復元すると、同時に上層礎石２は３側へ若干に移動することとなり、代わって上層礎石１は原位置に近い位置となり矛盾してくる。また、礎石根固めの対面に位置する、上層礎石１の後方に存在していたであろう控柱についてもA-B断面にその痕跡が残るものの撹乱により平面形が不明であるため正確な位置は復元できない。学校の門柱を建てるためにこれら大型の礎石を僅かな距離だけ動かすのかという疑問も残る。幕末期面と戦前までがほぼ同一層内に錯綜しており、後世の改変が著しいため検出遺構に対して柱位置状況がクリアになったとはいえないのが現状である。

下層遺構面（石黒大火以前）

上層遺構面から下層へ70～80㎝下がった位置で確認された石黒大火以前の層であり、下層礎石およびそれにともなう焼土面を指す。４石確認した石のうち正面側の近接した２石（下層礎石１・２）については上面の標高が11.34m、11.35mときわめて近く、太鼓御門南東側石垣（櫓台部分）との位置関係を考えても旧太鼓御門の礎石と考えられるものであった。また、原位置を動いていると考えられる、上層礎石上面（標高12.4m）との差は1.05mである。

大火前後の絵図を比較しても渡櫓自体については似た形態で描かれており、大火以前の門規模が記された史料もないため正確な門高を知ることはできない。大火時に渡櫓を乗せる両側の石垣が崩壊したとみられることから現況の石垣天端が火事以前の標高を踏襲しているかはわからない。また、平成19年度に実施した太鼓御門南東石垣（第２調査区から櫓台を挟んで対面側）裾部を調査した際Tr-６・７同様現地表から数十センチ下がったところで石垣の積み替え跡を確認しており、石垣が大規模に修理されたことがわかる。修理前後が同じ高さであったと仮定し、現況の石垣天端との標高を比較するとその差は4.6mとなり、嵩上げ土の高さを差し引いた分大きな門となる。

礎石はいずれも被熱により赤変しており、礎石上面より５㎝程度下がった位置で焼土面が広がっていた。焼土面の位置は大火時までは礎石が地表から５㎝程度露出していたことを示している。礎石の周辺では石垣にも被熱の跡が確認できた。礎石１～３側の石垣は、平成の石垣修理により積み直しがされており、原位置を保っているのは根石を含む１～２段程度であるが、そのいずれもが被熱によって赤変していた。Tr-６・７では礎石のレベルから１～２段程度のところから積み直しが行われている。この積み直しラインは嵩上げ土内のレベルに位置しているため、嵩上げ後の地表面には出ていなかったとみられる。

礎石はいずれも厚さが20㎝以上はある大きな石であり、表面は平滑な自然面もしくは粗割面である。地山を掘り込み据えられおり礎石１沿いに設定したTr-８では礎石の直下に花崗岩の岩盤を検出した。岩盤の表面は鑿状の工具での加工痕が残っており、礎石へ向かい傾斜しているため、礎石設置のための調整であったことが伺える。岩盤は石垣下へも続いていることから、石垣の一部も直接岩盤上に据えら

れているとみられる。地盤面直下の岩盤調整であることからも、鳥取城築城過程の一端を示す重要な発見であり、周辺地形から考え本来二ノ丸方向から伸びていた丘陵をカットしながら築城していった可能性が想定される。

焼土面はそれ自体の厚さは１～２㎝程度と薄く、直上には４～５㎝程度の層（A－B断面37層）がみられる。このA－B断面37層の上面は礎石上面と高さが近く、表面は硬化しており、A－B断面37層の上層には嵩上げ土が厚く敷かれている。薄い焼土面が遺存したのもA－B断面37層が大火直後に敷かれためと考えられ、大火以後嵩上げ・門再建までの一時的な地盤面であった可能性が想定できる。

赤変した土や多量の炭を含むこの面は一見してわかるほどのものであり、火災の大きさを物語っている。これほどの火災は藩政期に限れば城の大半を焼失したとされる石黒大火をおいて他に無く、三代藩主吉泰が３年の歳月を費やした三ノ丸の大改造からわずか２年での被災であり、その影響は計り知れないものであったと考えられる。

嵩上げ土はA－B断面37層上に70～80㎝ほど敷かれている。地山由来の橙黄色～黄褐色の砂礫土を用いており、工程差と考えられる数層の層位はみられるものの、ほぼ一度に整地されたと考えられる。整地方法はA-B断面土層では水平方向であるのに対し、C－D断面土層では傾斜に沿って斜め方向に敷かれており、違いがみられる。大手登城路の地盤面にこれほどの大土木工事を行うということは、建物配置などの上でかなりの計画変更があったとみられる。火事後の修復願絵図では櫓台部分の石垣崩落の記載しかないものの、江戸時代中期頃に成立した『因府録』では石垣普請をともなう大規模な工事をうかがわせる記録も残ることから、嵩上げもこの時に行われたのであろうか。

平成19年に実施した周辺調査でも幕末期面の下に嵩上げ土とみられる整地土や、嵩上げ時に埋められたとみられる石垣を確認しており、今回の調査結果を裏付けるものとなろう。

近代以降の鳥取城

明治期に入ると、三ノ丸に一時仮県庁が設けられたこともあったが、明治６年の所謂「廃城令」により陸軍省の管轄となった。以降、城内の建物は順に解体が進み、明治12年の二ノ丸三階櫓解体をもって完了したとされる。また、解体された建物類は払い下げられ各地に分散したとされているが、写真５(第３調査区付近）のように土塀類は一部手付かずのようであり、学校となった後にも残存していたようである。明治22年に鳥取西高校の前身である鳥取第一中学がこの地に移転してきて以来、現在まで学校として利用されている。

解体後、学校運営等でその姿を少しずつ変えて行った鳥取城であったが、昭和18年鳥取大地震により城内各所で被害を受けたようであり（写真６)、今回の調査区付近でも太鼓御門櫓が渡っていた両側の石垣とも崩壊することとなった。

戦後の昭和32年には中世から近世にかけての遺構群が並存していることなどを評価され、背後の久松山を含め「鳥取城跡附太閤ヶ平」として国指定史跡に指定、昭和62年に追加指定されて現在へと至る。

図　　版

1　第1調査区全景（西から）

2　第2調査区全景（南西から）

図版1

図版2

1　第2調査区Tr-6石垣積み替え（西から）

2　第2調査区Tr-7石垣積み替え（北西から）

3　第2調査区Tr-6全景（南東から）

4　第2調査区Tr-6・7全景（南東から）

5　第2調査区Tr-7北西土層（南西から）

6　第1調査区焼土面（南東から）

1　第1調査区下層礎石1・2（南東から）

2　第1調査区下層礎石3（南東から）

3　第1調査区Tr−9北東壁土層図（南西から）

4　第1調査区Tr−8岩盤（北東から）

5　第1調査区焼土面（南東から）

図版4

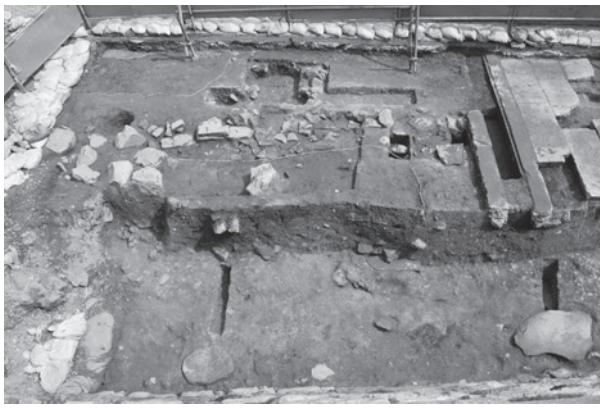
1　第2調査区礎石根固め（南東から）

2　第1調査区溝状遺構1（北東から）

3　第2調査区溝状遺構2･3（南から）

4　第1調査区A-B断面土層上層礎石1下部（北西から）

5　第1調査区A-B断面土層（北西から）



1　第1調査区東側全景（北西から）

2　第1調査区西側全景（北西から）

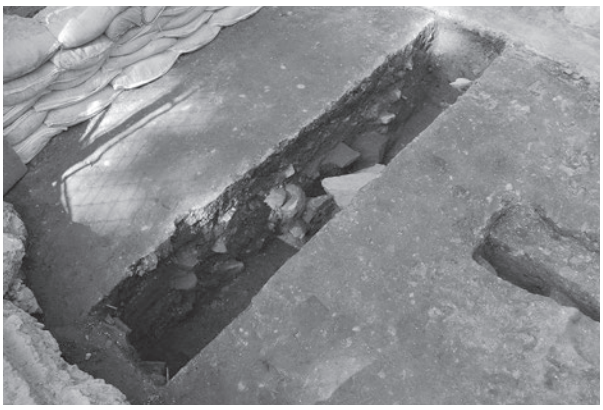
3　第2調査区全景（北東から）

4　第2調査区東側全景（南東から）

5　第2調査区西側全景（南東から）

6　第1調査区 Tr-1 全景（南西から）

図版6



1　第2調査区 Tr-2全景（南から）

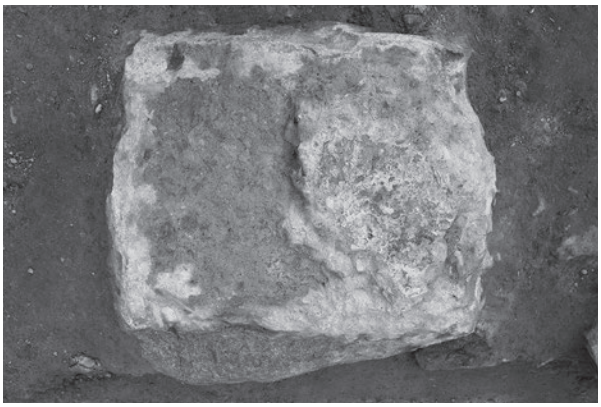
2　第2調査区 Tr-7北東壁土層（南西から）

3　第1調査区溝状遺構1（南西から）

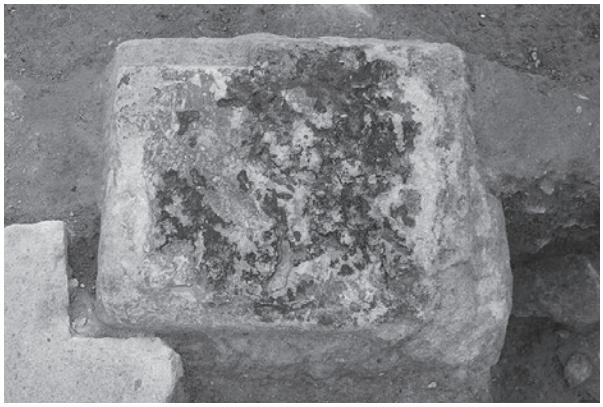
4　溝状遺構2土層（北西から）

5　第2調査区溝状遺構3（南西から）

6　上層礎石1（南西から）



7　上層礎石2（南西から）



8　上層礎石3（南西から）

1　上層礎石1・2（南西から）

2　土坑1（北西から）

4　C-D断面土層（南東から）

5　太鼓御門櫓台（西から）

3　礎石根固1（北西から）

6　礎石根固め2（北西から）

図版8

1　第3調査区 Tr-1 全景（北東から）

2　第3調査区 Tr-1（南西から）

3　第3調査区 Tr-1（東から）

4　第3調査区 Tr-1（南東から）

5　第3調査区 Tr-2 全景（北西から）

6　第3調査区 Tr-2 遠景（北西から）

1　第3調査区 Tr-3 全景（北西から）

2　第3調査区 Tr-3 北西側（北西から）

3　第3調査区 Tr-3 溝状遺構（南西から）

4　第3調査区 Tr-4 全景（南西から）

5　第3調査区 Tr-4 石垣接合部（西から）

6　第3調査区 Tr-4（南東から）

図版 10

1　第3調査区 Tr-4・5（南東から）

2　第3調査区 Tr-5全景（南西から）

4　第3調査区 Tr-6全景（南西から）

3　第3調査区 Tr-5南東壁土層（北西から）

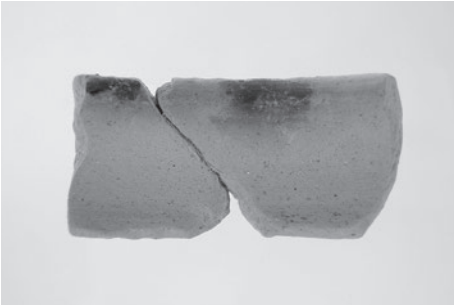
5　第3調査区 Tr-6南東壁土層（北西から）

1　第3調査区周辺（北から）

2　太鼓御門現況（南西から）

3　鳥取城遠景（南西から）
背後が久松山

図版 12



20 図－3

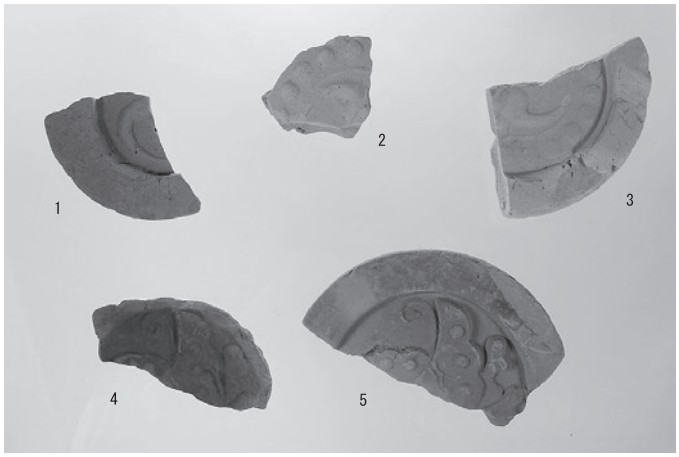
20 図－5

20 図－6

20 図－7

20 図－13

21 図－9



21 図－1～5

21 図－6

21 図－8

21 図－10

21 図－11

22 図－1

22 図－2

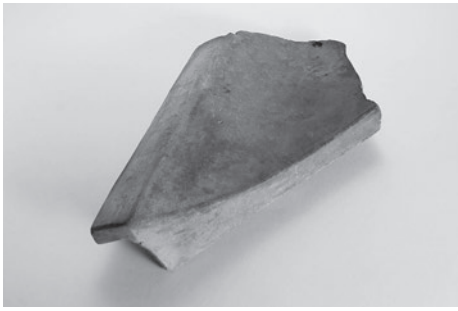
22 図－3

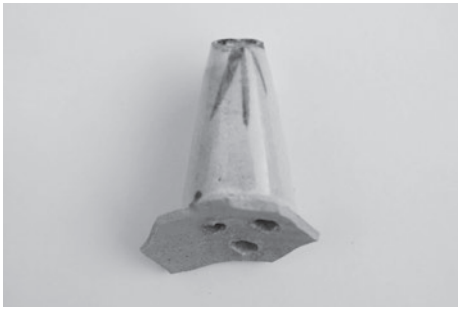
22 図－5

22 図－6

22 図－7

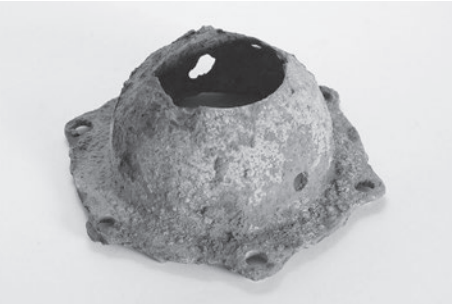
22 図－8


22 図－9


23 図－2

23 図－6

図版 14



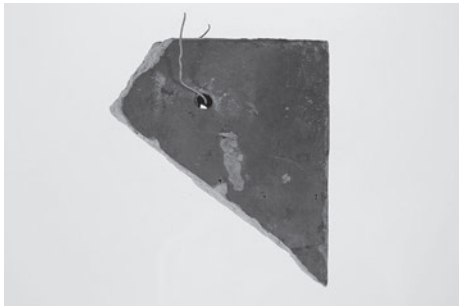
23 図－7

23 図－8

24 図－3

24 図－10

24 図－11



24 図－12

24 図－13

24 図－14

24 図－15

報告書抄録

ふりがな	へいせい20（2008）ねんど　しせきとっとりじょうせきたいこごもんあとはっくつちょうさほうこくしょ
書名	平成20（2008）年度　史跡鳥取城跡太鼓御門跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	坂田　邦彦　　細田　隆博
編集機関	鳥取市教育委員会
所在地	〒680-8571 鳥取県鳥取市尚徳町116番地
発行年月日	2009年３月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とっとりじょうあと 鳥取城跡	とっとりし 鳥取市 ひがしまち 東町	3120	鳥取 2-0211	35° 30′ 21″	134° 14′ 15″	20080720～ 20080823 20080823～ 20080927 20081001～ 20081121	110	史跡整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鳥取城跡	城跡	江戸時代	建物礎石跡 石垣等	瓦	史跡保存整備事業として実施

要約	太鼓御門は鳥取城大手登城路沿い、城の中枢部分である三ノ丸の入口に位置する門である。３箇所の調査区中の第１・２調査区では1720年の石黒大火を境とした新旧２段階の太鼓御門礎石および石垣の積み替え跡を確認した。また、大火後には70～80㎝の盛土によって地盤面を崇上げしていることもわかった。第３調査区では幕末期の地盤面を確認した。

平成20(2008)年度　史跡鳥取城跡太鼓御門跡発掘調査報告書

平成21(2009)年３月発行

編集・発行　鳥取市教育委員会

印　刷　所　株式会社矢谷印刷所